

栗東町埋蔵文化財発掘調査

1993年度 年 報



財団法人栗東町文化体育振興事業団

例 言

1. 本書は、財団法人栗東町文化体育振興事業団が受託した、1993年度埋蔵文化財発掘調査事業の概要と、栗東町教育委員会による国庫補助事業調査および町事業調査の概要である。
2. 調査にあたっては滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東町教育委員会が調査主体となり、財団法人栗東町文化体育振興事業団が実施した。尚、国庫補助事業および、町事業調査は、栗東町教育委員会が実施した。
3. 調査相当は、平井寿一、大崎隆志、近藤 広、雨森智美、佐伯英樹、猿向敏一、橋本奈保子、藤岡英礼、清水好洋（町教委兼務）が行った。
4. 本書の作成は、調査内容について各担当者が行い、編集を執筆者の意向のもとに佐伯が行った。
5. 各調査内容中の調査位置図は、スケールを指定しているもの以外はすべて、5千分の1である。
6. 調査参加者

現地調査作業

大 角 貴 則 森 野 靖 子
 森 智 美 青 木 タ キ 子
 宮 川 学 平 松 し ず 子
 富田由美子 川 崎 う た
 国松かよこ 石 原 恵 子
 池 田 清 子 西 岡 た よ 子
 西田百合子 国 松 好 子
 千代よね 渡 辺 典 子
 井 上 良 子 岩 倉 高 征
 今 村 梅 子 国 松 雅 宏
 木 下 政 子 清 水 宏 行
 西 村 寮 子 徳 地 久 弥
 久 徳 良 子 中 川 義 信
 井 上 妙 子 国 松 厚
 竹村ヒロ子 大 岡 道 代
 井 上 恵 子 辻 井 一 二 美
 伊勢村しずえ 上 田 和 江
 園 田 菊 江 横 山 こ と

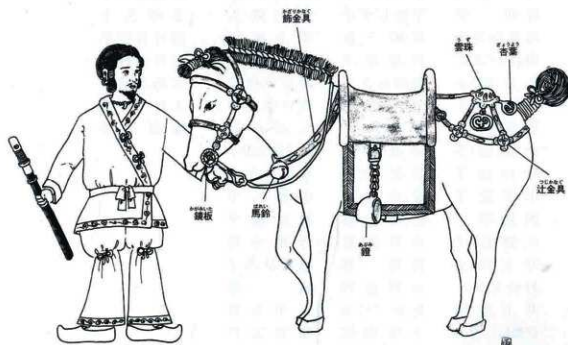
整理作業

大 橋 美 和 子
 長 濱 恵 美 子
 古 田 久 子
 福 村 賀 世 子
 奥 村 美 枝 子
 宮 嶋 八 重 美
 木 村 三 津 子
 藤 原 恵 美

目次

例言	1	辻遺跡	49
目次	2	中村遺跡	52
事業報告	3	小野遺跡	53
遺跡位置図	4	国庫補助調査	
受託調査		調査一覧表	55
調査一覧表	7	縄遺跡	56
縄遺跡	8	蜂屋遺跡	57
野尻遺跡	14	高野遺跡	58
下鉤遺跡	22	下戸山古墳	60
下鉤東遺跡	29	町事業	
手原遺跡	30	調査一覧表	63
高野遺跡	38	和田古墳群	64

表紙の写真 和田古墳群 上・5号墳石室
下・8号墳石室内遺物



和田古墳群出土馬具による、装着状況復元図

事業報告

1. 発掘調査事業

- 今年度受託件数：26件
(内、1994年度への継続：2件)
- 前年度からの継続件数：1件
- 国補・町事業への職員派遣件数：8件

2. 普及・啓発事業

現地説明会(栗東町教育委員会共催)

期 日：7月24日

遺 跡：手原遺跡

内 容：奈良～中世の掘立柱建物群

参加者：26名

期 日：8月29日

遺 跡：和田古墳群

内 容：古墳時代後期群集墳

参加者：175名

○スライド報告会

(栗東歴史民俗博物館共催)

期 日：9月18日

会 場：栗東歴史民俗博物館

内 容：1992年度調査の主要遺跡の
スライド映写による紹介

参加者：38名

○速報展(栗東歴史民俗博物館共催)

期 日：9月8日～10月11日

会 場：栗東歴史民俗博物館

内 容：1992年度調査の主要遺跡の
調査成果の展示

参加者：1800名

○部内研修

期 日：9月10日

行 先：奈良市(平城京跡資料館他)

内 容：調査作業員の研修

参加者：43名

○冊子等の発行

冊子名：1992年度年報Ⅰ

1992年度年報Ⅱ

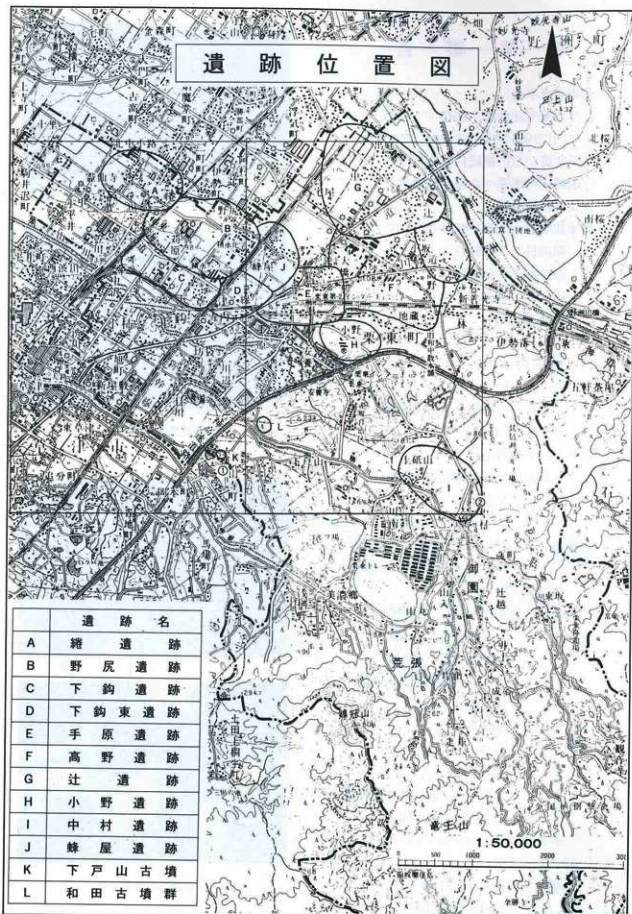


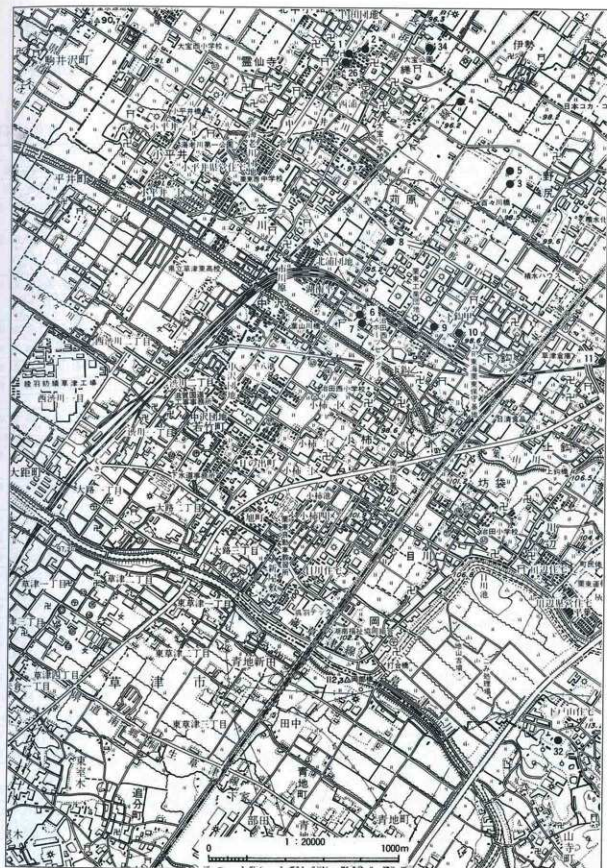
和田古墳群現地説明会



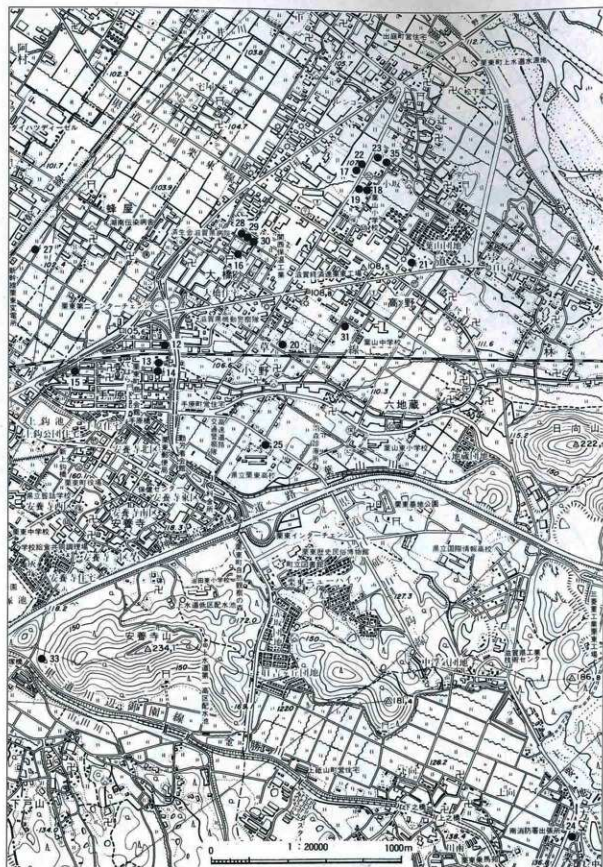
手原遺跡現地説明会

遺跡位置図





遺 跡 位 置 図 ①



遺跡位置圖 ②

財団法人栗東町文化体育振興事業団 埋蔵文化財調査

受託事業一覧表

遺跡	調査地	原因	遺構	遺物	頁	担当
1 緒遺跡	北中小路字森の東26-1	共同住宅建設	水溝・掘立柱建物(鎌)	黒色土器、土師器、磨針	8-11	藤岡
2 緒遺跡	緒682-1	共同住宅建設	ビット・井戸(平)、暗渠(中)	灰釉陶器(平)、黒色土器(中)	12	橋本
3 野尻遺跡	野尻438-2	道路工事	溝(中)、井戸状遺構、暗渠	縄文土器、須恵器、土師器、黒色土器 白磁、信楽焼、灰釉陶器	13	雨森
4 野尻遺跡	緒字天道72他	土地区画整理	方形周溝墓(弥)、溝、土墳(奈) 溝・土墳・流路(中) 溝・土墳・暗渠・地蔵跡(近)	弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器 緑釉陶器、灰釉陶器 輸入磁器、近世陶磁器	14-19	猿向
5 野尻遺跡	緒字天道50他	土地区画整理	流路(弥)、溝・土墳(古) 溝・土墳・井戸・流路(中) 溝・土墳・暗渠(近)	弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器 灰釉陶器、緑釉陶器、輸入磁器、 近世陶磁器、銅線、銅(奈)	20-21	猿向
6 下鉤遺跡	下鉤1110	共同住宅建設	溝(弥〜平)、土墳(弥)、掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器	22	近藤
7 下鉤遺跡	下鉤1102-1、1186、1187-1	共同住宅建設	掘立柱建物、土墳、ビット	弥生土器、須恵器	23	平井
8 下鉤遺跡	劫原119、120、123	遊技場建設	溝、掘立柱建物	土師器、須恵器	24-25	平井
9 下鉤遺跡	下鉤字大街谷1712他	工場増築	掘立柱建物・堅穴住居(弥) 土墳墓・流路・井戸(中)	弥生土器 黒色土器、土師器	26-27	大崎
10 下鉤遺跡	下鉤字金ヶ辻1169	造成工事	掘立柱建物(平)	土師器、黒色土器、灰釉陶器	28	雨森
11 下鉤東遺跡	上鉤125	倉庫建設	落ち込み(弥)、掘立柱建物(中)、暗渠	須恵器(白)、黒色土器	29	橋本
12 手原遺跡	手原7丁目829、830、831	倉庫建設	掘立柱建物・井戸・溝(奈〜平)	土師器、須恵器、瓦、緑釉陶器 灰釉陶器、黒色土器	30-31	近藤
13 手原遺跡	手原3丁目929-1	倉庫付事務所建設	溝(白)掘立柱建物(奈〜平) 井戸(平)	須恵器(杯、把手付長頸壺、大口壺) 曲物、斎事	32-33	雨森
14 手原遺跡	手原3丁目926	倉庫建設	溝(白)、掘立柱建物(古・奈〜平)	古式土師器、須恵器、土師器	34-35	雨森
15 手原遺跡	手原5丁目1212	共同住宅建設	溝・掘立柱建物・土墳(中)	須恵器、土師器、黒色土器、瓦(白)	36-37	平井
16 高野遺跡	大嶺4丁目324、325	共同住宅建設	流路、掘立柱建物、ビット	須恵器(白)、黒色土器	38	橋本
17 高野・辻遺跡	高野地先	土地区画整理	流路・溝(古〜江) 土墳・ビット(縄〜江)	縄文土器、石器、土師器、須恵器 灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器	39-40	近藤
18 高野遺跡	高野568-1	児童館建設	古墳、掘立柱建物(平〜鎌)	土師器、黒色土器、瓦器	41-42	藤岡
19 高野遺跡	高野568-1	児童館建設	土墳、溝(中〜近)	瓦、土師器	43	平井
20 高野遺跡	六地藏字高木1147-1、1147-3	倉庫建設	流路(古)、掘立柱建物(奈) 土墳・ビット(中)	土師器、須恵器、黒色土器	44-46	藤岡
21 高野遺跡	高野335他	共同住宅建設	流路・掘立柱建物・土墳(平〜鎌)	土師器、黒色土器	47-48	藤岡
22 辻遺跡	高野616-1	共同住宅建設	溝(平)、古墳・堅穴住居(古)	縄文土器、土師器、須恵器、黒色土器	49-50	雨森
23 辻遺跡	小坂西419-1	作業所建設	流路(古〜平)、掘立柱建物(平)	土師器、須恵器、黒色土器	51	近藤
24 中村遺跡	御園1829	医院・薬局建設	溝、ビット	土師器、須恵器、黒色土器	52	清水
25 小野遺跡	小野字中音井656、601-1、662-4	変電所建設	掘立柱建物・溝(奈)	土師器、須恵器	53-54	雨森

調査中(94年度〜継続)

34 緒遺跡	緒字中ノ橋	共同住宅建設	溝列(古)	須恵器、土師器		雨森
35 辻遺跡	辻字小坂西415-2	宅地造成工事	掘立柱建物、土取り痕(江)	縄文土器、須恵器、土師器		大崎

遺構では、下記の略語を用いた。

(縄) 縄文時代、(弥) 弥生時代、(古) 古墳時代、(飛) 飛鳥時代、(白) 白鳳期
(奈) 奈良時代、(平) 平安時代、(鎌) 鎌倉時代、(室) 室町時代、(江) 江戸時代
また、時代が特定できない場合は(中) 中世、(近) 近世と表すことがある。

① 縄 遺 跡

調査地 栗東町大字北中小路字森ノ東26-1

調査期間 1994年1月12日～3月22日

調査面積 300㎡



調査地位置図

縄遺跡は、野洲川と草津川が形成した扇状地の先端に立地する。地形は西に向かってゆるやかに傾斜し、中ノ井川を利用した灌漑用水にも恵まれた農業に適した地域である。また、古代以来の東山道(中山道)や琵琶湖に通じる志那街道が走り、中ノ井川水運が活用される等、交通の要衝でもある。遺跡範囲は縄・北中小路両大字に広がり、当調査区はその西端に位置する。

歴史的環境を、過去の調査を中心に概観すれば、弥生時代の遺跡には、方形周溝墓。奈良・平安時代の遺跡には掘立柱建物が検出されている。

中世では、掘立柱建物や流路が広範囲に検出されている。特に1988年度の調査では、集落を区画する大溝の一部が検出された。大溝は幅5m、深さ1.6mあり、13世紀代の遺構とされる。大溝は近世まで存続しており、中世の遺構が直接踏襲されたと言える。大溝の範囲は遺跡内でも、大字北中小路周辺に限定される。この他、1990年度の調査でも13世紀の掘立柱建物・区画溝が検出された。建物は区画溝の内外で、規模の相違があり、階層性を持つものと考えられている。中世の縄遺跡

は13世紀代をピークとしている。

本調査地は、1988年度調査区に隣接する地点にある。調査は2つのトレンチに分けて実施した。基本層序は大別すると三層に分けられ、上層から耕土・暗灰色粘質土(包含層)・茶褐色粘質土層(地山)からなる。検出した遺構の全ては地山層において認められた。包含層には奈良時代～近世に至る遺物が含まれていた。以下トレンチ毎に概述する。

トレンチ1

溝・柱穴が検出された。SD-1は、トレンチ南側で片側部分を検出した。検出幅1.5m、検出深1.2mを測る。堆積土は二層に分かれ、上層は黄褐色土層、下層は青灰色粘質土層である。下層は遺物を含まないが、上層は黒色土器等(図2-1・2・3)が含まれており、おおむね13世紀代に埋設したと考えられる。土質により、下層は溝の流動で堆積したものであり、上層は人為的な埋積によるものと考えられる。

SD-2は、幅約1.5m、深さ約0.5mを測る。SK-1は、SD-1・2を掘り込んだ近世の遺構である。検出幅4m、深さ約2mあり、底部から木枠の一部が検出された。過去の調査では、大字北中小路周辺に灌漑用の井戸が多数検出されている。しかしながら、検出遺構は井戸ではなく、その他の灌漑施設を想定すべきと考えられる。

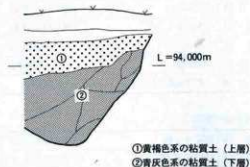


図1 トレンチ1、SD-1断面図

トレンチ北側では、ピット・溝を検出した。

溝は、ピットに先行して作られた他、条里地割りに平行し、緑釉陶器（図2-4）や黒色土器片が出土した。このことから、所属時期はおおむね古代後半～中世前半に収まるものと考えられる。

トレンチ2

掘立柱建物・ピット・溝・大溝等を検出した。トレンチ南側で確認したSB-1・2はSD-9を挟む西対岸に柱穴を検出した。両建物は西に規模を広げ、SB-1は2×7間以上、SB-2は2×4間以上が想定できる。

SB-3は2×3間以上、SB-4は1×4間、SB-Sは2×3間の規模を確認した。SB-1・2・3は、所属時期を特定できる遺物に恵まれなかったが、SB-4は13世紀中～後半頃、SB-5は12世紀後半～13世紀前半頃に想定できる。これらの建物相互の時期差は明確にできないものの、方位軸がN-50°-Wを大きく振れるものは無く、総体的に同一軸を呈するため、時代幅は大きくないと考えられる。後述するSD-9が13世紀代の遺構と考えられるため、建物規模がSD-9に制約を受けないSB-1・2が12世紀頃の遺構であり、制約を受けるSB-3・4・5は13世紀代の遺構と考えられる。

本トレンチでは東西方向の溝を、トレンチ南側を中心に検出した。溝はピットや掘立柱建物・SD-9に先行する。方位軸はトレンチ1の溝と類似しており、関連する時期に成立したと考えられる。

SD-2は、幅約1.5m、深さ約0.5mであり、堆積土は、灰褐色粘質土である。重複関係からSD-9に後出する。出土遺物には信楽焼の掘鉢があり、15世紀中頃のものと思われる。15世紀代の遺物を含有する遺構はSD-2のみである。

SD-9は、幅約5m、深さ約1.8mの規模であり、断面は逆台形状である。堆積土は、上層に黄褐色土層、中層に青灰色粘質土層、

下層に粗砂が混入した暗灰色粘質土層である。上層からは13世紀後半を中心とした黒色土器（図2-8・9）が出土し、下層からは、13世紀中頃と考えられる珠洲焼の壺（図2-7）や黒色土器等が出土した。上層は土質により人為的に埋積されたと考えられる。このことから、SD-9は13世紀中頃まで機能し、後半には廃絶したと考えられる。これは掘立柱建物の消長にも対応しており、大溝を伴う屋敷地が形成されていたと思われる。

以上が調査の概略であるが、本調査地でも留意されるのは、トレンチ1・SD-1、トレンチ2・SD-9で、両者は堆積土が類似する大溝の一部と考えられる。大溝は1988年度に調査された環濠集落の一部を成すが、環濠集落は屋敷地毎に大溝で区画されていたものと思われる。大溝は13世紀後半頃に埋没するが、その後の屋敷地の動向は不明である。

今日の大字北中小路や西に隣接する大字霊仙寺は環濠集落の形跡を見せる。環濠内の屋敷地は大溝による区切りはなく、個々の屋敷は集落の濠へ一元的に近い把握がなされている。現集落の成立時期は明らかでないが、中世以来の変遷を含めて検討されねばならない。

緒遺跡は12～13世紀代が遺構所属年代の主流をなすが、これには荘園の一種たる「総村保」の立荘と関係があると思われる。今後は荘域内の開発や屋敷地の分布状況を把握し、中世集落の復原・変遷を考えねばならない。

（藤岡）



トレンチ1全景

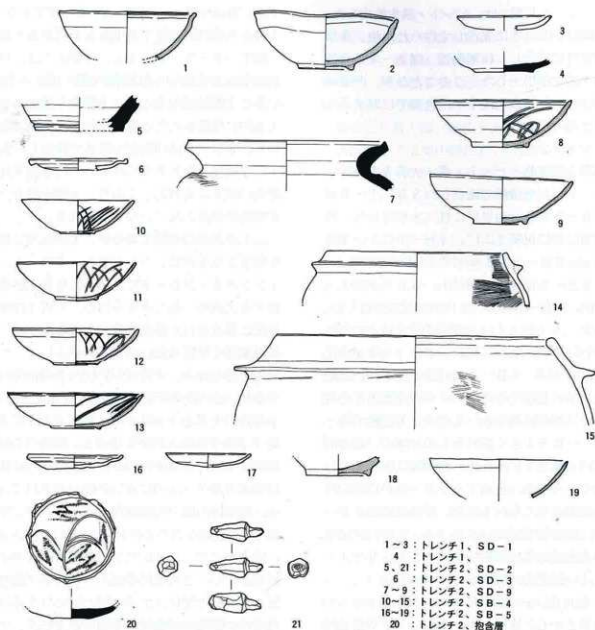


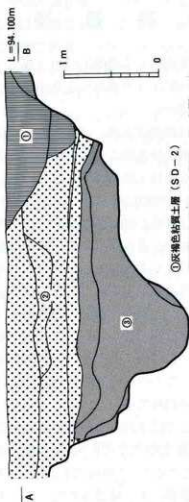
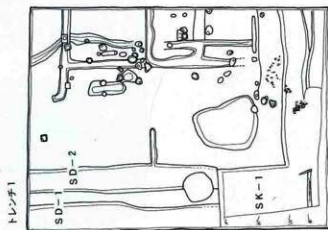
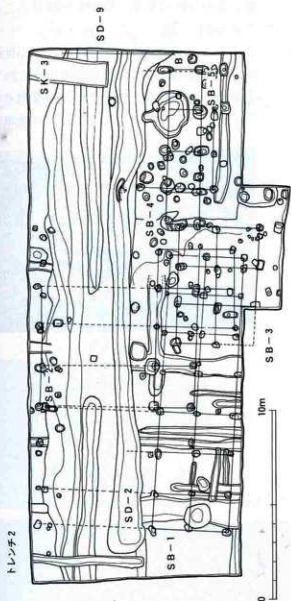
図2 出土遺物実測図 (S=1/4)



トレンチ2 SD-9



トレンチ2全景



- ①灰褐色粘質土層 (SD-2)
- ②黄褐色系の粘質土層 (SD-9 上層)
- ③青灰色系の粘質土層 (SD-9 下層)

SD-9 断面図

図3 調査地環境図

② 縄 遺 跡

調 査 地 栗東町大字縄682-1の一部

調査期間 1993年4月20日～5月26日

調査面積 188㎡

本調査では暗渠排水溝、ピット群、井戸を検出した。暗渠排水溝は竹管を使用したもので、埋土から黒色土器片が出土している。中世のいずれかの時期に該当するものであろう。

ピット群は縦横が80×60cm程度の方形の掘り方を持つものが混在している。深さは遺構面より1mほどである。これらは柱穴と考えられるが、残念ながら明確な建物のプランはわからなかった。調査地南側の円形の井戸は残存する深さは80cmであった。建物と同時期と思われるこの井戸からは10世紀初めの灰釉碗が見つかっており、平安時代における当地域の初めての資料である。

調査地周辺では北西にある都市計画道路沿いを中心に弥生時代と思われる周溝状遺構（周溝墓と考えてさしつかえない）が、1982、89、90年度調査により確認されている。また各調査とも12世紀から15世紀までの間の掘立柱建物を検出している。さらに柵列、井戸、溝などを伴っており、古代末～中世における



調査地位置図

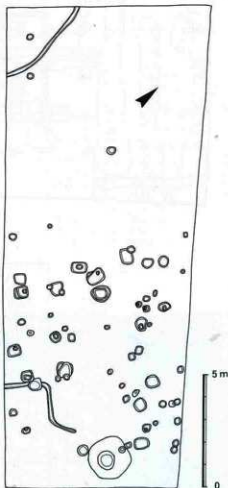
縄、北中小路の集落の様相を垣間見ることができる。

このように縄遺跡は弥生時代と、13世紀を中心とする中世との複合遺跡と周知されているため、今回の調査結果は今後の課題となろう。

(橋本)



調査地全景



調査地遺構図

③ 野 尻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字野尻438-2

調査期間 1993年12月2日～1993年12月24日

調査面積 305.76㎡



調査地位置図



◀暗渠調査風景



調査地北東部分（南西から）



井戸状遺構肩部断面

今回の調査地でみつかった遺物で最も古いものは、縄文土器であるが、細片のため詳細は不明である。つぎに奈良時代ころの土器がみられるが、包含層の出土で、これにともなう遺構はみられない。

中世の遺物には黒色土器、瓦質土器、白磁などがあるが、いずれも遺構には伴わない。調査区からは、条里方向の溝が出土しており、埋土の状況等から中世のものである可能性がある。この溝の上には明灰色土が堆積し、さらに明灰色土上から掘削されているのが井戸状遺構である。その時期については調査区内に縦横につくられた暗渠以前のものとするほかの手がかりはない。井戸状遺構は栗東駅東口より連続と続いていた可能性があり、その性格や時期については今後の研究にゆだねられる点が多い。

（雨森）



④ 野 尻 遺 跡

調査地 栗東町大字鏡字天道72他

調査期間 1993年4月1日～1993年11月30日

調査面積 7,890㎡

野尻遺跡は、標高1,200m程の鈴鹿山系から源を発し、琵琶湖へ西流する野洲川が形成した標高100m程を測る扇状地の扇端と氾濫原との境に位置する。過去の調査からは、縄文時代後期から近世にいたる遺構・遺物を確認しているが、その中心は弥生時代末から古墳時代初め、および平安時代末から鎌倉時代初めであることが判明している。また、88年度の調査では、一辺約50mの方形溝で区画された古墳時代の居館跡を発見し、当時の古代豪族を知るうえで重要な知見を得た。

今回の調査は、JR東海道本線栗東駅前土地区画整理事業の第五期工事に伴う発掘調査である。89年度よりはじめた本事業も年度とともに周辺部へと進み、今年度は北端部の約18,750㎡がその対象となった。

調査にあたっては、区画整理対象地を前期と後期に分けて行った。ここで報告するのは、北端部西半にあたる前期調査分である。

掘削にあたっては、対象地に合わせ1～21のトレンチを設定した。また、対象地の制約からトレンチによっては、それぞれ東・西・南・北・中央部に分け、21-Nトレンチ・21-Sトレンチとした。

以下、その概要を報告するが、その詳細については、また期を改め報告することとした。

層序 調査地で認められる基本的な層序は、大別すると基本的には次の3層である。上層から、層厚20cm程の現代耕作土層、中世期の遺物を包含する層厚15cm程の黄灰色系粘質土の盛土層、そして、黄褐色粘質土層の地山層である。遺構の検出にあたっては、基本的にこの地山層上面で行った。

遺構 検出した遺構は、弥生時代末から古墳時代初め、および平安時代末から鎌倉時代初めの土壇・溝・耕作痕、古墳時代の溝のほか、近世期の井戸状遺構・暗渠排水路などである。今年度も4地点において地震跡を検出した。特に17-Wトレンチでは、深さ2.7mにわたる断層面を調査することができた。

ここでは、主なトレンチの主要遺構についてその概要を述べることとする。



調査地位置図 (1:4,000)

今回の調査地は、遺構検出状況等から概ね中央部から東部にあたる1～6・10～14・16～21トレンチと、北西部にあたる7～9・15トレンチとにその様相を分けることができる。(1～6・10～14・16～21トレンチ)

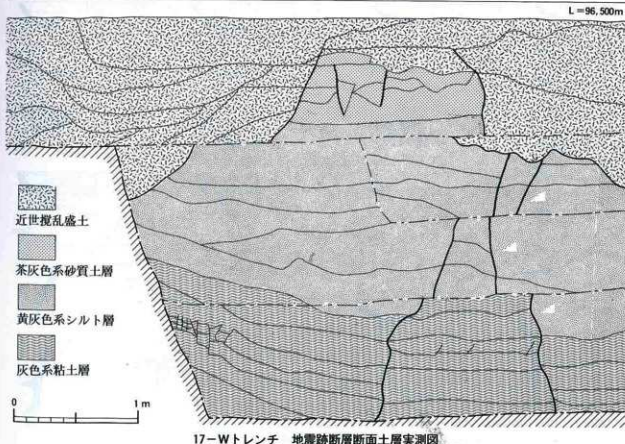
現地地表下20cm程の黄褐色粘質土層の地山層および近世擾乱盛土層において、近世から現代期の暗渠排水路・耕作痕等のほか、従来より確認されている井戸状遺構を検出した。

暗渠排水路は、幅0.2m程のもので重複関係より数時期が認められた。竹の配管をビニール紐で束ねたもののほか木製枠のものもある。概ね、木製枠の方が丁寧な作りのように見えるものの、土層層序から決して近世期を遡るものではないようである。

井戸状遺構は、近世擾乱盛土層および地山層において11基程検出した。初年度より総数157基確認している。その性格については不明な点が多いものの、その構造や位置関係から農業用の灌漑施設であろうと考えられる。

地震跡については、90・92年度の調査において液状化現象の痕跡である噴砂を、また、91年度の調査では現地地表下3mにおよぶ断層を検出している。これらの地震跡については、通産省工業技術院地質調査所の寒川 旭氏の指導を受け調査することができた。その結果、寛文2(1662)年の琵琶湖西岸地震の可能性が高いことが判明している。今回の調査では、9・17-W・18トレンチの4ヵ所において顕著な断層が認められた。

17-Wトレンチでは、下層確認の断ち割りにより断層を検出することができた。断層は北東-南西方向に延びており、上位土層1m程は近世擾乱盛土および井戸状遺構のため不明であるものの、検出長2.7m・最大変位量0.4m程度の正断層を確認することができた。また今回の調査では、変位土層を特定するためさらに掘削を行った。その結果、現地地表下3.9m・層厚0.5m程のツクモ層が変位最下層であることが判明した。



(7・9トレンチ)

7トレンチでは、現地表下20cm程の黄橙灰色粘質土の地山層において、数条の暗渠排水路・井戸状遺構を検出した。下層確認のため、トレンチ北壁際に断ち割りを行ったところ、土層断面において東西方向の流路を検出した。検出長7.0m・最大幅6m・深さ0.7mを測る。最下層の灰色砂層を含む灰色シルト層より、概ね13世紀前後の土器が出土している。

今回検出した流路は、過去の調査の中世期遺構の検出状況および、その規模・立地から、本トレンチの南側に東西に流れる現中ノ井川と同様、農業用水路としての役目を担っていたものと考えられる。

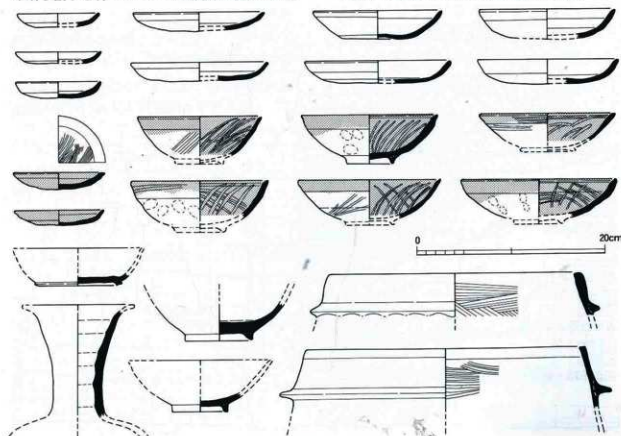
9トレンチでは、現地表下0.2m程の黄橙灰色粘質土の地山層において、近世の暗渠排水路のほか、7トレンチの流路の延長部を検出した。さらに、南端部で中世遺構面が落ち込んでいる状況が窺えたことから、トレンチ西壁際の断ち割りを行ったところ地震跡を検出した。

地震跡は、検出長2m・最大変位量0.4m程の北-南方向に延びる正断層であり、変位しているのは、灰色粘性シルト・粘土層である。現地表下2.7m程のツクモ層まで掘削を試みたが、それ以上は調査安全上のため断念した。また、17-Wトレンチで検出した断層と同様、上位土層1m程は近世攪乱盛土および井戸状遺構のため不明である。

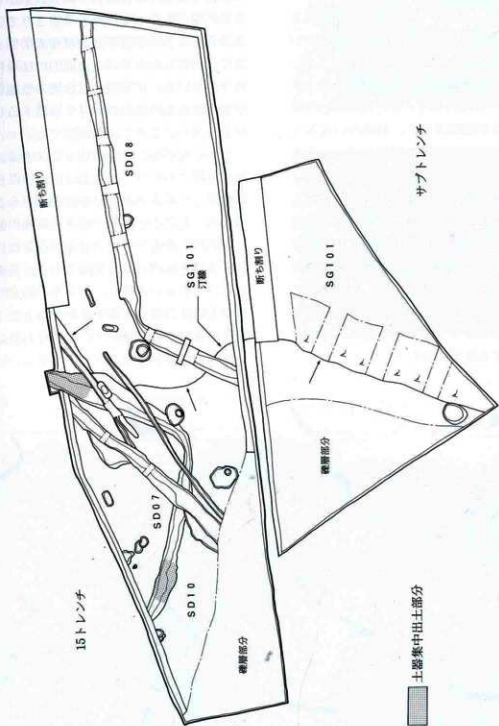
(15トレンチ)

15トレンチでは、現地表下0.2m程の黄橙灰色砂質土の地山層において、弥生時代後期の方形周溝墓、奈良時代前半の溝のほか、中世期の土墳・溝・耕作痕などを検出した。

方形周溝墓は、西・南辺を検出したものの、北・東辺については、15トレンチ北側の守山市域となるためその規模は不明である。周溝(SD10)は、一辺10m以上・深さ0.6m程を測る。周溝の埋土は大局的に3層に分かれ、遺物的には、西辺では上層で、南辺では下層においてそれぞれまをもって出土した。



7トレンチ 流路最下層土器実測図



15トレンチ 遺構図 (1:200)

奈良時代前半の溝(SD07)は、東西方向のもので、検出長10.5m・深さ0.1m程を測る。埋土は灰色系砂質土の単一土層であり、須恵器・土師器が出土した。

中世期の溝(SD08)は、L字状に延びるもので検出長21m・深さ0.2m程を測る。中世期の土師器・黒色土器・陶磁器が出土した。

15トレンチの西端は、灰色砂礫層の地山が現耕作土直下で認められ、また東端では中世期盛土層が広がることから、旧地形の観察と下層遺構確認のための断ち割りをトレンチ北壁東端に行った。その結果、トレンチ東側に広がる中世盛土層は、落ち込み状の沼沢に行った整地によるもので、土層層序的には、弥生時代後期および奈良時代前期にも同様の整地が行われたことが判明した。方形周溝墓の南辺は、この落ち込み(SG101)とつながっている。また、広がりを確認するために、南側に拡張した15サブトレンチでもその汀線と同時に弥生土器が出土した。

まとめ 以上、調査の概略を述べた。最後に若干の整理を行いまとめとしたい。

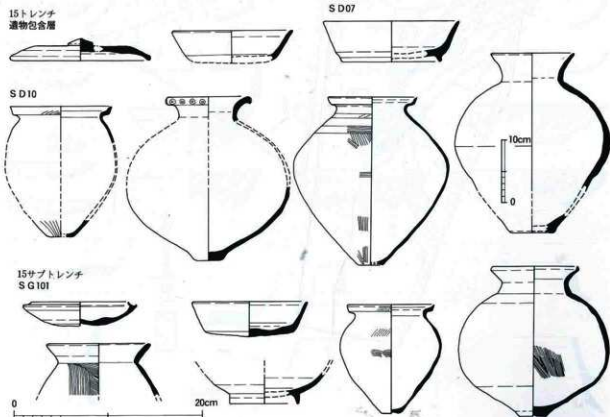
(遺跡の立地) 野尻遺跡の西端に位置する本調査地周辺には、過去の調査成果から広域な沼沢地が広がっていると予想されていた。本調査地における経年度の調査成果も、これまでに報告したように、大局的には現耕作土直下において、中世期・近世期の整地層および滞水性粘土の地山層が厚く堆積する状況を呈しており、このことを補強する。

しかしながら、今回の15トレンチは、調査地の北限にあたり、立地的には河岸段丘上位に位置し、前述のとおり成果を得ることができた。このことから、調査対象地の制約から広範囲の調査対象地の設定が行えないものの、本調査地における遺跡の中心は両極にあるといっていよう。つまり、弥生時代後期の大規模の掘立柱建物群を検出した守山市域となる伊勢遺跡側がその北部であり、南部が下溝遺跡側となる。

15トレンチ
遺物包含層

SD10

15サブトレンチ
SG101



15トレンチ・15サブトレンチ 土器実測図(大型品は1/6)

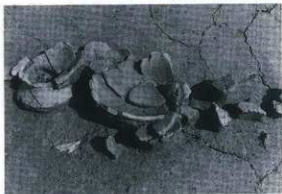
(伊勢遺跡との関係) 15トレンチと北接する伊勢遺跡は、守山市大字伊勢町に位置する。過去の28次にわたる調査からは、弥生時代後期・古墳時代前期・中世期を中心とする複合遺跡であることが判明している。特に、弥生時代後期の遺構では、92・93年度の調査において、全国的にも最大規模の床面積をもつ高殿・楼閣と考えられる高床式の建物を検出している。また、大型掘立柱建物群のほか、堅穴住居40棟程をはじめ、この弥生時代後期の大集落周辺域にはさらに方形周溝墓群が広がっていることが知られる。

遺跡の内容的にも立地的にも、まさに今回の方形周溝墓は、伊勢遺跡の弥生時代後期の墓域の南端部であるといっていよう。

このような状況からは、行政区の相違から遺跡名称が異なることは避けられないものの、今後、調査を進めるにあたっては、遺跡内容・立地条件などにより、細分化を含めた名称の再検討の必要性は否めないだろう。(猿向)



17-Wトレンチ 断層断面土層状況



15トレンチ SD10 土器出土状況



15トレンチ 完掘状況全景(西から)

⑤ 野 尻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字箆字天道50他

調査期間 1993年12月1日～1994年3月31日

調査面積 2,480㎡

今回の調査は、JR東海道本線栗東駅前土地区画整理事業の第五期工事に伴う93年度後期発掘調査である。調査対象地は、区画整理対象地の北端部東端にあたる。今回の調査の総調査対象地は、4,200㎡である。

掘削にあたっては、対象地に合わせ1～12のトレンチを設定した。また、対象地の制約からトレンチによっては、それぞれ東・西に分け、6-Eトレンチ・6-Wトレンチとした。

以下、その概要を報告するが、その詳細については、期を改め報告することとしたい。
層序 調査地で認められる基本的な層序は、大別すると基本的には次の3層である。上層から、層厚20cm程の現代耕作土層、中世期の遺物を包含する層厚15cm程の灰色系粘質土の盛土層、そして、灰黄色系砂質土層の地山層である。遺構の検出にあたっては、基本的にこの地山層上面で行った。

遺構 今回の調査地は、立地的に前期調査の15トレンチと同様河岸段丘上位に位置する。そのため、遺構のほとんどは、前述のとおり現耕作土直下の灰黄色系砂質土層の地山層において確認することができた。

検出遺構は、弥生時代後期から古墳時代の流路・溝のほか、平安時代末から鎌倉時代初めの頃の土壌・溝・耕作痕、および近世期の井戸状遺構・暗渠排水路などである。

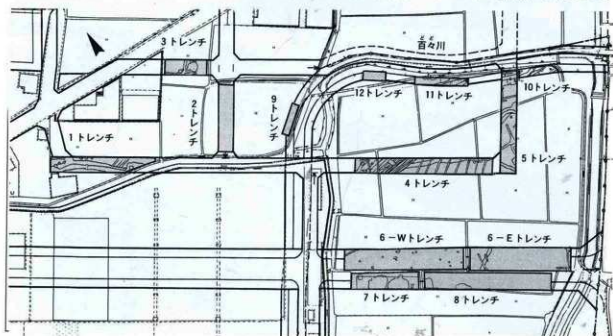
以下、ここでは、主なトレンチの主要遺構についてその概要を述べることにする。

(4 トレンチ)

西端部に中世期の溝群を、中央部から東端にかけて古墳時代の溝と近世期の暗渠排水路を検出した。

中世期の溝群(SD101～103・106～108)は、6基程が東西方向に並行しており、概ね検出長10m・幅0.8～3m・深さ0.4～0.7m程を測る。下層には、幅1.5～2.6m程を測る旧流路も認められることから、数時期にわたってこのような状況になったと考えられる。

古墳時代の溝(SD01)は、東西方向のもので、検出長24m・幅1.6m・深さ0.4m程を測る。東端は依然、5トレンチの溝群へと延びる。



トレンチ配置図 (1:2,000)

(5 トレンチ)

5 トレンチでは、北端において弥生時代後期の溝を、中央部から南端にかけて古墳時代の溝を検出した。

弥生時代の溝 (SD102) は南北方向の溝で、検出長10m・幅3m・深さ1.2m程を測る。埋土は大局的に3層に分けることができる。上層の層厚0.6m程を測る暗茶色系粘土・粘質土層、中層の層厚0.3m程を測る暗灰色系粘性シルト、そして下層の層厚0.3m程を測る鉄分を含んだ灰色系砂層・シルト層である。遺物的には、中層より鋤をはじめ木製品が、下層より銅鏃や少量の土器が出土した。土層堆積状況および遺物の出土状況から、上層は廃絶後の自然堆積によるものと考えられる。

SD102は、本調査地における調査で検出した弥生時代遺構の中では、最大の規模の溝である。積極的に理解すれば、調査範囲が狭いながら環濠の一端である可能性もある。今後の調査に期待したい。(猿向)

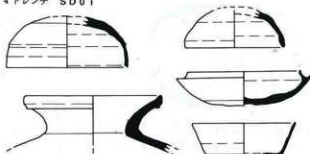


5 トレンチ SD102 鋤出土状況

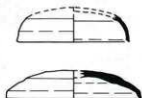


5 トレンチ SD102 出土銅鏃

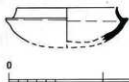
4 トレンチ SD01



5 トレンチ SD05



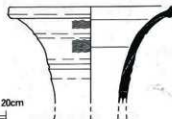
5 トレンチ SD101



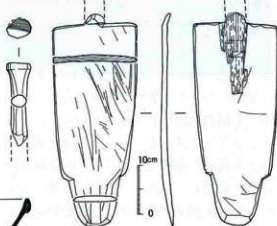
4 トレンチ SD103



4 トレンチ SD106~108下層



5 トレンチ SD102



4 トレンチ SD108



遺物実測図

⑥ 下 鈎 遺 跡

調査地 栗東町大字下鈎1110

調査期間 1993年9月27日～10月17日

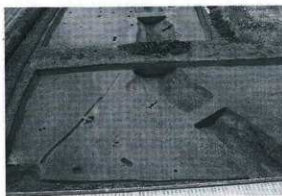
調査面積 約370㎡



調査地位置図

下鈎遺跡を代表する時期として弥生時代をあげることができる。現段階では中期後半と後期中～後半にかけての2時期の遺構、遺物が確認されている。なかでも後期においては、1992年度の調査において棟持柱をもつ5×2間(床面積47.5㎡)の巨大な掘立柱建物や、鳥居状遺構の存在は注目される。今回の調査地は、これらの遺構が確認された場所から南へ約300mといった地点である。

確認された遺構は、溝、掘立柱建物、土坑、ピット等があり、时期的には弥生時代中期後半(I期)と、古墳時代後期から平安時代(II期)の大きく2時期に分けることができる。I期の遺構としては、SD-1、SK-1、SX-1がある。SX-1は北東方向へのびる溝状の遺構で、埋土中に炭化物が多量に堆積していた。この他、SB-1についても埋土の特徴からこの時期のものである可能性が高い。II期のものとしては、T1、T2にまたがるSD-2がある。規模は、幅約2.5～3.5m、深さ約0.7～1.0mで、東から西方向へのびてから、中央付近で北西方向に折れ曲がる。遺物は、弥生土器の他に上層から灰釉陶器、中層から須恵器の杯・蓋(図1)が出土している。(近藤)



東(T1)から西(T2)を見る

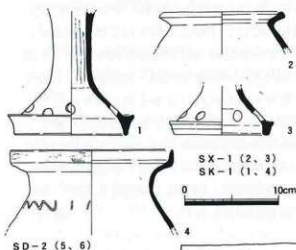


図1 SX-1, SK-1, SD-2出土遺物

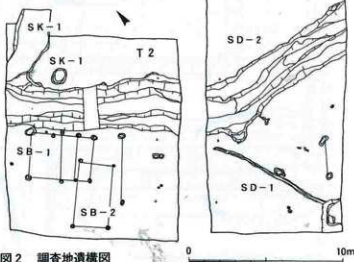


図2 調査地遺構図

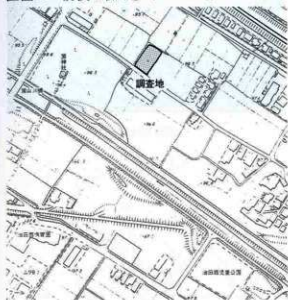
⑦ 下 鈎 遺 跡

調査地 栗東町大字下鈎1102-1, 1186他

調査期間 1993年10月20日～11月2日

調査面積 300㎡

掘立柱建物跡SB-1は、2間(3.8m)×4間以上(7m以上)の規模、SB-2は、2間(3.3m)×4間(5.1m)の規模である。これらの建物の柱穴は、直径15cm～30cmで不整円形を呈し、深さは15cm～30cm、柱根跡は直径10cm前後を測る。SB-1はSB-2を



調査地位置図

切っている。SB-3およびSB-4も建物跡の可能性がある。SA-1は、SB-1・SB-2の地区とSB-4の地区を分ける柵列であろう。土壇SK-1は、直径1.6m深さ0.9mを測る。受口状口縁甕の口縁、同じく体部(波状文、楕描直線文)、壺の把手、壺の口縁部(凹線文)、壺頸部(凸帯装飾)などが出土した。これらは弥生時代中期後半に比定されるものである。

溝SD-1は、SK-1に接し幅50cm、深さは僅か5cmの残存である。凹線文をめぐらせた壺の口縁部など数点の土器片が出土し、その時期はSK-1と同じくする。

掘立柱建物跡、柵列跡および小ピットについては、それらの時期を示すような出土遺物には恵まれなかった。(平井)



調査地全景

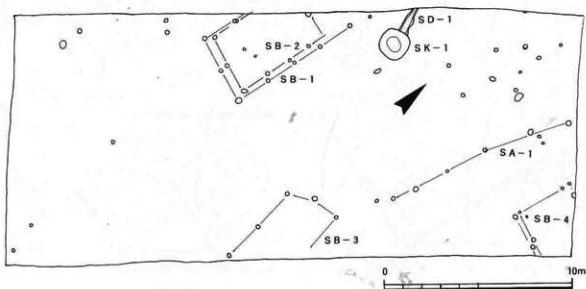


図2 調査地遺構図

⑧ 下 鈎 遺 跡

調 査 地 栗東町大字刈原119, 120, 123

調査期間 1994年1月18日～2月4日

調査面積 370㎡

本調査地は、昭和63年度に一部を調査され、幅8m以上、深さ1.5mの流路が検出されている。この流路からは弥生時代後期から古墳時代後期の土器が出土し、古墳時代末頃の小溝に切られている。

今回の調査では、昭和63年度の調査地点と一部重複しているため、重複部分は調査から除外した。

今回検出された遺構は、条里方向の細溝4条と、掘立柱建物跡1棟、ほぼ正東西方向の溝3条とそれらに直行する小溝1条である。

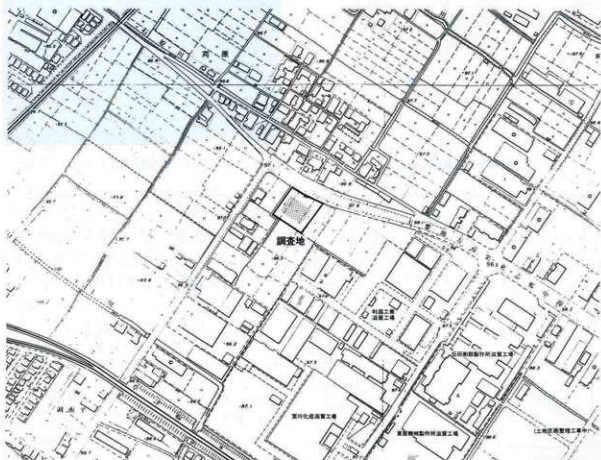
細溝は、幅平均30cm、深さ10cm前後で、検

出面の凸凹により途切れる部分もある。建物の柱穴を切っており、建物より新しい時期のものであることがわかる。

掘立柱建物跡は、4間×4間分が検出され、それ以上の規模で調査地外に広がる可能性がある。柱の掘形の埋土は、褐灰色粘質土で若干の炭化物・土器片を含むもの（P-2、P-3）がある。柱穴出土の土器は、直径約13cmの黒



調査地全景



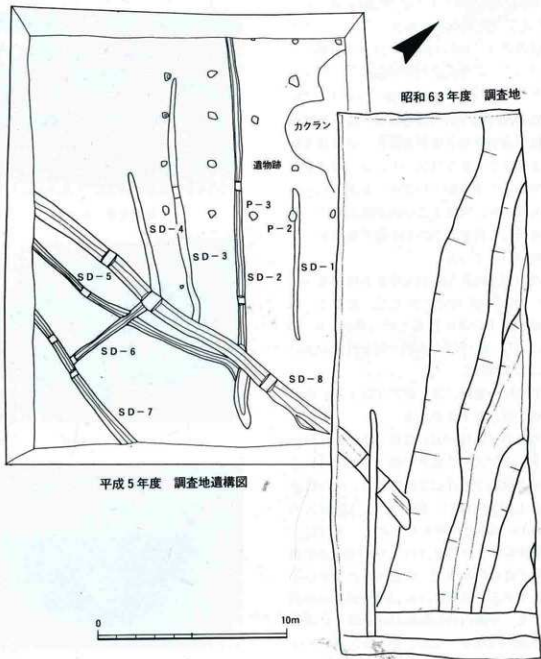
調査地位置図

色土器の甕あるいは鉢で、平安時代中頃のものと考えられる。

東西方向の溝のうちSD-8は、溝幅約1m、深さ約40cmを測り、埋土は灰褐色粘質土である。年代を示し得る遺物には恵まれなかったが、昭和63年度調査の古墳時代末の小溝が続くものである。(平井)



掘立柱建物跡▶



⑨ 下 鈎 遺 跡

調 査 地 栗東町下鈎字大街谷1712～1716

調査期間 1993年1月10日～2月26日

調査面積 1,200㎡



調査地区位置図

下鈎遺跡は縄文時代前期以降、様々な時代の遺構・遺物を残す複合遺跡として周知されている。中でも弥生時代のそれは、環濠集落（中期）や大型の掘立柱建物（後期）などの存在も知られ、隣接する中沢遺跡と共に、葉山川流域に位置する当該期の拠点集落として位置付けられている。

今回の調査地は先述の大型建物検出地から南東へ約0.7kmの地点にあたる。遺構はいつも、耕土直下の黄灰色粘土層（標高：97.70m）にあり、弥生時代後期と鎌倉時代初頭の2期に大別される。

弥生時代の遺構には、竪穴住居1棟、掘立柱建物2棟、溝1条がある。

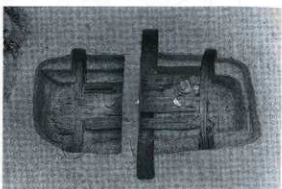
竪穴住居（SH-01）は検出時に地床炉が露呈するほど大きく後世の削平を受けているが、屋内遺構の遺存は良好であり、その構造を知る上で興味深い一例である。住居は6.9m×5.3mの隅丸形状を呈する。主柱は4本構造を取り、柱間寸法は3.3m×2.4mを測る。柱穴径は約30cmで、床面からの深さは50cm前後である。壁際には幅15cm～20cmの壁溝がめぐる。壁溝内には板材痕様の細長い落ち込みが認められる。なお、東・西辺沿いには2条の壁溝が各々見られ、東西方向へ住居の



調査区南東区（土墳墓群）



竪穴住居（SH01）



土墳墓（SK18）



井戸（SE01）

拡張・改築が為されたものと推察される。床面中央には地床炉があり、5cm程度の厚さの炭化物の遺存が見られる。炉は径1m程度の緩やかな掘り込み内の南端にさらに径50cmの掘り込み（深さ20cm）を有する。また南辺沿いには中央に径30cmの柱穴を有する一辺50cmの方形の掘り込みが見られ、その北側には径10cm前後の小柱穴が並び、その一端からは住居中央へしきり溝が延びており、出入口様の体裁を備えている。先述のしきり溝と同様の溝は他にも見られ、それと交差し、西辺へ延びるものや北西・北東の主柱穴からL字状に延びるもの等があり、住居使用の一端を知り得る良好な資料の一例となろう。

掘立柱建物は3柱間×1柱間と4柱間×1柱間の2棟がある。規模は4.2m×3.2mと5.8m×3.8mを測る。

鎌倉時代初頭の遺構には流路、井戸2基、

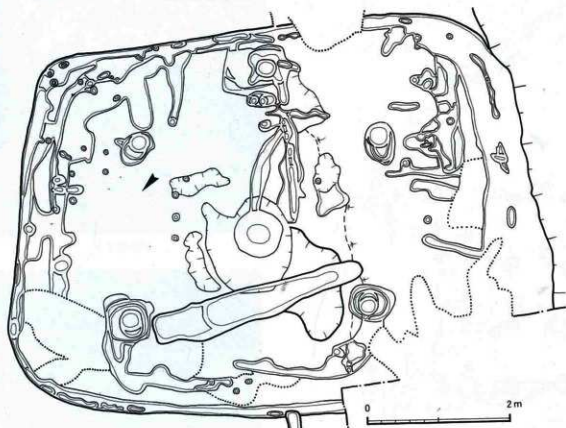
土墳墓や小溝群がある。

流路は幅員3mを測り、西流するもので、その両側に井戸や土墳群が散在している。

井戸は円形と方形の掘りかたを持つ例がある。前者は径1.5m、後者は1.4m×1.2mを測り、その中央に曲物を有する。

土墳群はいずれも墓的性格を有するもので、長方形（1.4m～3.7m×0.6m～1.0m）と不整円形（0.6m～1.0m）の2類がある。前者の一例であるSK-18は2m×0.8mの掘り込みの長辺沿いに各々3コの小柱穴（径10cm）が残り、さらにその上には直交して長さ1.6mの幅広の板材（幅10～20cm）が数枚遺存していた。管見では類例を知らないが、あえて復元すれば、長方形の土墳墓直上に構築された仮設の小規模建造物の一部とも想像される。今後の資料の蓄積を待って、改めて検討を加えたい。

（大崎）



竪穴住居（S H01平面図）

⑩ 下 鈎 遺 跡

調 査 地 栗東町下鈎字金ヶ辻1169

調査期間 1994年2月22日～2月28日

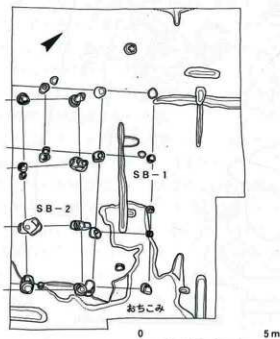
調査面積 170㎡

葉山川右岸の下鈎遺跡は、縄文時代前期から中世にいたる複合遺跡である。本調査区の東側隣接地では、中世の掘立柱建物などが出土し、西側においては、溝・土壇が発見され須恵器や滑石製白玉が出土している。

今回の調査では、掘立柱建物跡2棟（SB-1、2）、古墳時代のおちこみがみつかっ



調査地位置図



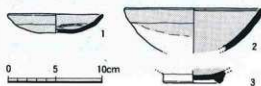
調査地通構図

ている。

SB-1は、3間×3間以上で南側が土間になっていると考えられる。SB-2は、3間×1間以上の規模をもつもので、SB-1より新しく、建て替えられた建物である可能性はある。SB-1・2の柱穴からは、黒色土器碗・皿、土師皿、土師質羽釜が出土しており、それらの年代から建物は12世紀代のものと考えられる。今後、周辺調査事例とも併わせて下鈎一帯の中世集落の広がりを考え得る資料になるであろう。

また、調査区東側では、建物の柱穴に先行して黒褐色土の堆積するおちこみがあり、古墳時代初頭の高杯などの破片が出土している。

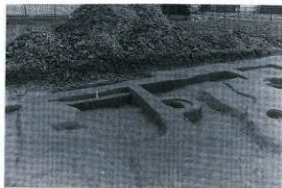
(雨森)



出土遺物実測図



調査地全景



古墳時代初頭のおちこみ

⑪ 下 鈎 東 遺 跡

調 査 地 栗東町大字上鈎125

調査期間 1993年 7月14日～31日

調査面積 232㎡

'92年度調査では隣接地より弥生時代後期の落ち込みと中世の建物、暗渠を検出している。

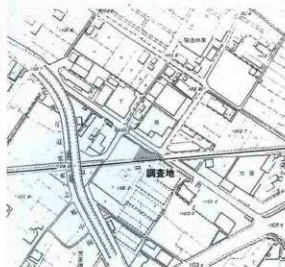
今回の調査では弥生時代末の土器片を含む層と13世紀の黒色土器を伴う2×3間（又はそれ以上）の掘立柱建物を確認した。弥生時代に属するのは濃褐色粘土層で遺構面の北1/3程度を覆う。プランはしっかりしていないが深さ10～20cm、隣地へと続く落ち込みであろう。下層確認のため遺構面をさらに掘り下げると60cmで礫層にあたった。（橋本）



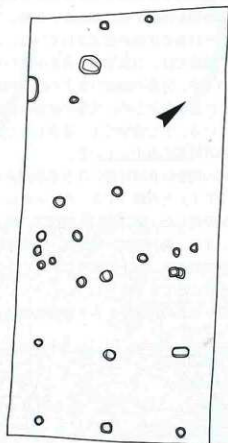
調査地全景



作業風景



調査地位置図



0 5m

調査地遺構図

⑫ 手 原 遺 跡

調査地 栗東町手原7丁目829,830,831

調査期間 1993年2月4日～1994年7月31日

調査面積 約1,100㎡



調査地位置図

手原遺跡は、JR草津線手原駅周辺にひろがる遺跡である。この一帯は、湖南平野に一般的にみられる栗太郎条里とは異なる正南北方向の地割が残存することから、従来より古代寺院や官衛の存在が想定されていた。これまでの調査では、白鳳寺院の存在を思わせる多量の瓦や、官衛の施設と考えられる柱礎をそろえた倉庫をはじめ、大型の建物群が確認されている。また遺物では、墨書土器や蛇紋岩製の石帯等が出土している。

今回の調査は倉庫建設に伴う事前調査で、東側(T1)と西側(T2)の2ヶ所にトレンチを設定した。確認された遺構は、掘立柱建物、井戸、溝、土坑、耕作痕、暗渠等がある。時期的には、以下のように大きく3つに分けることができる。

I期 奈良時代後半から平安時代中頃(8

世紀後半～10世紀前半)

II期 平安時代後半から鎌倉時代前半(11世紀前半～12世紀後半)

III期 江戸時代以降(17世紀～)

掘立柱建物は、確認できたもので36棟存在し、主軸が磁北より6°～7°東へ振った建物もしくは磁北の建物が大半を占める。II期前半になると磁北より西へ振った建物が主流となり、III期になると再びI期と同様な主軸をもつ建物が増加する。I期の建物は官衛に関連する建物と考えられ、T1では1986年度の調査で確認された倉庫群の続きと思われる総柱の建物が確認されている。T2でも性格は判断しにくい、比較的大型の建物が中央から北側にかけてまとまって存在する。II期では、井戸が存在する空間地(広場)をとりまくように、2棟が1組なる状態で建物が存在していたと思われる。III期では、T1において4×4間のほぼ同一プランの建物が並列して存在している。この他、注目すべきものに、T2東隅で確認した溝(I期)から、ふいごの羽口片、ガラス滓と思われるものが出土している。これらの遺物は須恵器や土師器と伴に多量の炭に混じって出土した。またこの溝に接して、炭の堆積した円形の土坑が東側に存在した。これらの遺構、遺物は、鋳造もしくは鍛冶等を行っていた遺跡によくみられるものであり、T2の東側から南にかけて、官営的な工場が存在していた可能性が推測される。

(近藤)

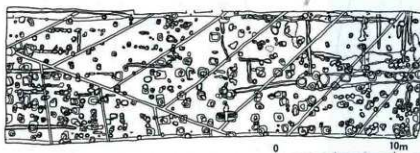


図1 T1遺構図



T1 III期ビット出土遺物

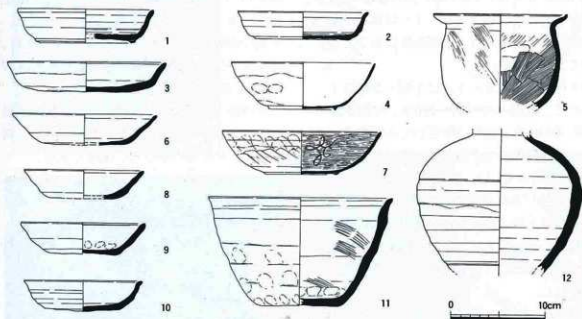


図2 I・II期の遺物 (T2井戸3、6~12)



T2 東端溝の炭化面



T2 I期土坑出土遺物

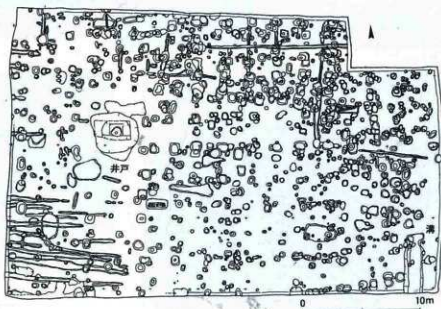


図3 T2遺構図

⑬ 手 原 遺 跡

調 査 地 栗東手原3丁目929-1

調査期間 1993年4月22日～5月31日

調査面積 75㎡

本調査区は、⑬調査区の南側に隣接している。現況では、両調査区の間にはJR草津線が通っており、景観は大きく変わっている。今回の調査でみつかったのは、掘立柱建物溝、井戸などである。溝(SD-1)は周辺地割と方位を異にしており、⑬調査区にのびているので、後述する。

掘立柱建物(SB-1)は2間×2間以上のもので、柱掘り方が80～100cm、柱間距離が240～260cmと、規模の大きいものである。SD-1埋没後につくられている。

井戸(SE-1)は、調査区南端でみつっている。掘り方は不整円形で直径は約270cmである。最上層は淡灰褐色砂礫層で、約60cm堆積している。最上層からは灰釉陶器が出土しており、底部に「會」と考えられる墨書が認められた。

井戸枠は、一木を縦に三ツ割にし、削りぬいたものを組み合わせたもので、直径(内法)

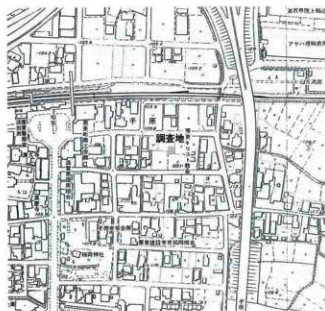
が70～45cmで、厚さ約8cmである。土圧により、上部はやや変形している。遺存する枠の長さは、約315cmである。削りぬき枠の下には、直径約65cmの曲物枠が据えられていた。上部の削りぬき枠と曲物枠は、土圧によりずれが生じていた。

枠内には、礫混じりの青灰色粘質腐食土が堆積しており、奈良時代末から平安時代初頭の遺物が含まれていた。遺物は、検出面より270cm下で、須恵器壺、土師器、杯身が出土している。さらに30cm下がったところでは、小型の曲物が出土した。検出面下340cmでは、斎串および須恵器広口壺、さらに検出面下370cmでも斎串が出土している。

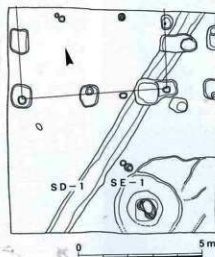
井戸底の曲物枠内からは、須恵器把手付長頸壺、須恵器杯身が出土した。長頸壺は、肩にうすく自然釉のかかる、優品である。



作業風景



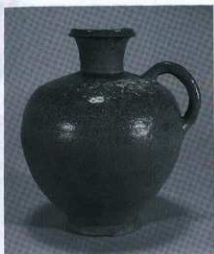
調査地位置図



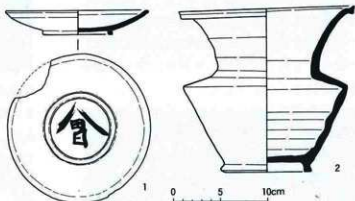
調査地遺構図

奈良時代後半以降の手原遺跡では、総柱建物を中心とした、企画性の高い建物群がみつかり、役所跡の可能性が考えられてきた。1992年度の調査では、2間×6間以上の庇付建物などが出土し、総柱建物群と異なる

建物群を構成している。今回の調査区では、井戸が出土しており、付近に厨房施設を伴う何らかの建物群が存在した可能性があり、手原遺跡の全体像を知る貴重な手がかりとなろう。(雨森)



須恵器把手付長頸壺 (SE-1 出土)



SE-1 出土土器

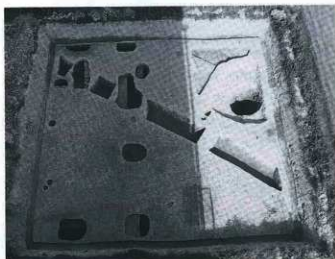


写真 (左中、左下) SE-1 土器出土状況
(右上) 調査地全景、
(右下) SE-1 完掘状況



⑭ 手 原 遺 跡

調 査 地 栗東町手原 3 丁目926

調査期間 1993年4月20日～5月31日

調査面積 235㎡

本調査区は、⑬調査区の南西側に隣接している地点である。1990年度には北側に隣接した地点でも調査を実施しており、3×3間の総柱建物などが出土している。

今回の調査では、従来から手原周辺では具体像の明らかでなかった古墳時代初頭の集落の一部がみつまっている。検出された遺構は、掘立柱建物3棟（SB-1～3）、土壇（SK-1）である。SB-1は1×3間で、建て替えの痕跡がみられる。SB-2は1×2間で、側柱列の中央の柱がやや外側に張りだしている。SB-3は1間×3間の掘立柱建物である。SB-1～3の柱穴は、直径約20cm、深さは検出面下約10～30cmである。SK-1は隅丸長方形を呈し、長辺80cm、短辺60cmを計る。深さは約40cmである。これら掘立柱建物による当該期の集落は、近年調査事例も増加しつつある。今回の調査成果も掘立柱建物集落の構成を考え得る資料であり、また



調査地位置図

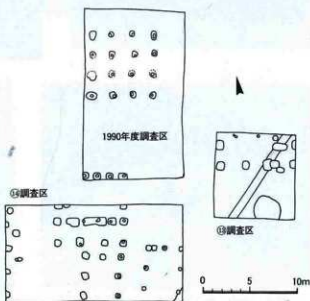
栗東町における古墳時代の開始期を知る手がかりにもなろう。

手原周辺に遺る正南北地割の直前にあったものと推定される遺構には溝（SD-1）がある。溝の方位は磁北を東に約45°振るもので、これに直交する方位の溝が手原一帯で散見されており、ほぼ同一時期と考えられる。

奈良時代から平安時代には、現地割に沿った建物群がつけられる。SB-6は、1990年度調査区南端の柱列と同一建物と考えられ、3×5間で、南側に3間の柱列をもつ構造である。柱掘り方は隅丸方形で、1辺70～80cmである。柱の深さは50～100cmである。中央3本の柱掘り方は布掘りになっている。SB-4、5は、2×3間以上の南北棟建物である。柱掘り方は30～60cmである。

手原遺跡のなかでも、今回の調査区周辺では、総柱建物・庇付建物・小規模な側柱建物といった建物群で構成され、さらに⑬調査区で発見された井戸が付随していることが明らかになった。また、正南北地割以前にも計画的な溝があった可能性が考えられ、手原の地割の形成を知る手がかりとなるであろう。

（雨森）



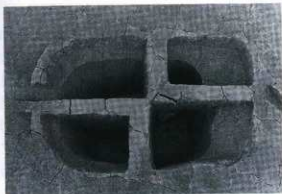
調査周辺図



調査地全景写真



SB-6



SK-1



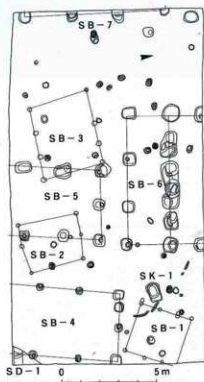
SB-4



SB-2 断ち割り状況



SB-3



調査地遺構図

⑮ 手 原 遺 跡

調 査 地 栗東町手原5丁目1212

調査期間 1993年10月12日～10月27日

調査面積 300㎡

本遺跡は、早くから古瓦の散布地として知られ、また、栗太平野に広く分布する条里とは異なった正方位の地割りが遺存する事により、古代寺院跡の可能性を指摘されていた。

昭和56年の栗東町商工会館建設に伴う調査を始めに、既に20数回の調査が実施され、大きな成果を上げている。特に、手原駅の北側と東側では、整然と建て並べられた倉庫群および大規模な東西棟建物などの発見と、石帯など役人の存在を示す遺物の出土があり、8世紀中頃から9世紀を盛期とした、何らかの官衙遺構であることが確実視されている。

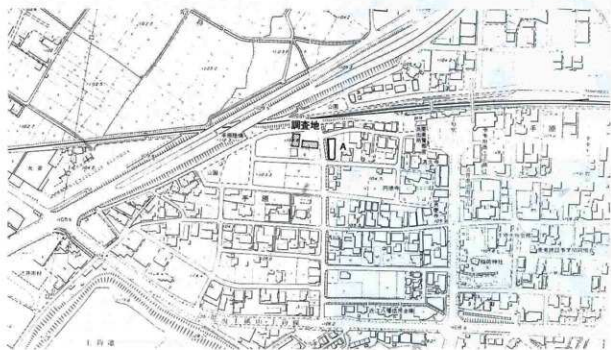
一方、手原駅周辺からは、寺院関連の遺構は発見されていないものの多くの瓦の出土があり、その出土範囲も絞られてきつつある。また、本調査地に近く1992年度に実施されたA調査地では、2間×7間以上の規模で、東

側と南側に底をもつ白鳳期の大規模な南北棟建物跡が発見され、寺院に関連する可能性のある建物跡として注目されている。

さて、今回の調査でもA調査地に近い東側で瓦溜まりが検出され、白鳳期の古瓦を中心に多数の瓦片が出土した。また、古墳時代の溝跡、中世の掘立柱建物跡、溝跡を検出した。地形は、T-1は平らであるが、T-2から西側へ緩く落ちている。地山は、高い部分では灰褐色粘質土、低い部分では、淡い黄褐色粘質土であった。

掘立柱建物跡SB-1は、2間以上(4.3m以上)×4間(8.7m)の規模で掘形は基本的には方形を呈し、大きさは25cm～40cmを測る。SB-2は、2間(4.5m)×2間以上(3.8m以上)の規模で、東側にもう2間分広がる可能性がある。これらの建物の柱穴あるいは他のピットから、12世紀後半の土師皿、黒色土器等が出土している。

SX-1は、T-1東側に広がる深さ10cmの落ち込みの中でさらに10cmほど深くなっている部分である。白鳳期から奈良時代の瓦片が多数出土している。



調査地位置図

SD-1は、幅0.6mから1mの溝で、深さ0.45mを測る。下層は、明灰褐色粘質砂土と青灰色粘質土が堆積し、14世紀以降の遺物が出土する。最上層では、最近の遺物が混じっていることから、10数年前に実施された、区画整理以前まで存在していた溝であることが解った。

SD-2は、幅1mから1.3m、深さ0.5mを測る。主に茶褐色粘質土が堆積する。部分的な検出であるので、溝であるのかどうかその詳細は明らかではない。6世紀の須恵器杯蓋、高杯の脚等が数点出土している。

SD-3は、SD-1に先行する溝である。幅1.5m、深さ0.25m前後で、暗灰褐色粘質土が堆積する。11世紀代の灰釉土器碗が出土した。

以上、期待されていた寺院関連、あるいは8、9世紀の官衙関連の遺構は検出されなかったが、古墳時代の遺構が新たに発見されたことと、中世集落がより広がっていたことが明らかにになった。
(平井)



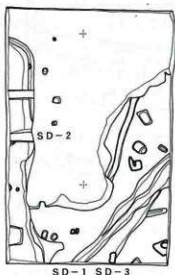
T-1 瓦溜まり(SX-1)



T-1



T-2



T-2

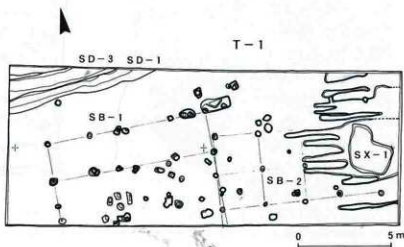


図2 調査地遺構図

⑩ 高野遺跡

調査地 栗東町大字大橋4丁目334、325

調査期間 1993年5月14日～6月18日

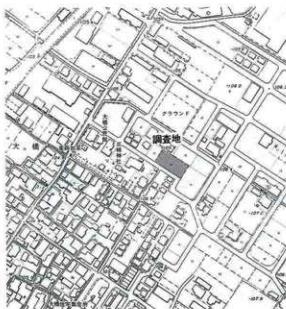
調査面積 260m²

本調査では流路、掘立柱建物、ピットを確認した。流路からは7世紀と思われる須恵器の杯身が出土、掘立柱建物は若干の黒色土器片を埋土に含むものの時期の判明に至るものではない。流路は深さ1m以上のもので何度か流れを変えながら埋没したものであろう。

建物はその後に建てられたものだが1×2間で、周囲のピットとも関連する跡はなく、性格不明なものである。(橋本)



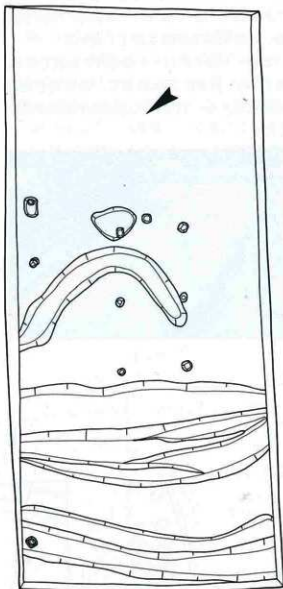
調査地全景（南東から）



調査位置図



調査地全景（北西から）



0 5 m

調査地遺構図

⑰ 高野・辻遺跡

調査地 栗東町大字高野地先

調査期間 1994年1月17日～継続中

調査面積 約1,500㎡



調査地位置図

発掘対象地周辺は、高野・辻遺跡にまたがる地区で、縄文時代中期から近世以降にいたる遺構が確認されている。なかでも古墳時代においては、過去10数次にわたる調査によって、広範囲に広がる大規模な集落群を形成していたことが明らかになっている。また中世以降近代まで続いた、『辻鋳物師』に関連する遺構や、瓦製作に伴い、原料となる粘土を採ったとされる土坑も注目すべき遺構のひとつである。

今回の調査は、辻・小坂西部地区土地区画整理事業に伴う第1次調査で、中ノ井川に沿った北側にあたる道路予定地を4つのトレンチに分けて調査した。確認された遺構、遺物は以下のように大きく7時期に分けることができる。

I期縄文時代、II期古墳時代（4～6世紀）III期白鳳時代（7世紀）、IV期奈良時代（8世紀）、V期平安～鎌倉時代（9～13世紀）、VI期室町～安土桃山時代（15～16世紀）、VII期江戸時代以降（17～20世紀前半）

I期の遺構は、古墳時代以降の生活面（地表面から約40cm下げた面）から約70～80cm下げた地点で確認できる。遺構埋土は、識別し



T1下層面 作業風景

にくい、土器片や石の混じりおよび炭化物、焼土等によってかろうじて判断できる部分が認められた。確認できたものは、わずかに焼土化したピットが7ヶ所と堅穴住居にみられる壁溝のようなものを2ヶ所確認した。これらの遺構は、堅穴住居もしくはキャンプ用の簡単な建物に伴うものとも考えられるが、ピットが焼土化していることや、プラン的に不明

点があり、明確な判断は今後の調査に譲る。

II～VI期の遺構は、旧河道もしくは溝の痕が中心である。遺物が多く出土した遺構に、T1・SD-2（IV期）、T4・旧河道（II～V期）、T4・SD-5（V～VII期）がある。なかでもT4・旧河道からは、官衙・寺院等の遺構から出土することの多い緑釉の小瓶（図3-1）が出土している。この他の遺構としてはVII期のものと考えられる耕作痕や採掘土坑がある。（近藤）

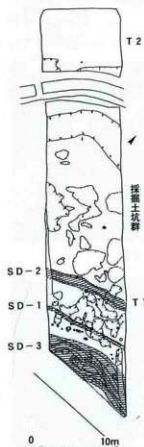


図1 T1・T2遺構図

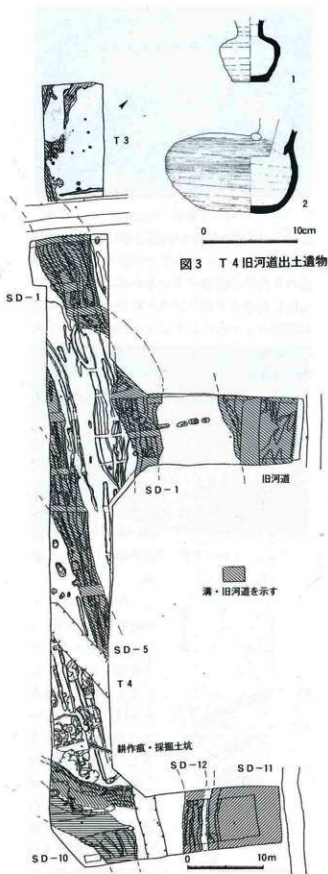


図3 T4旧河道出土遺物

図2 T3、T4遺構図



T1下層面 縄文時代遺構



T1 SD-1、3 北から南をみる



T4 西から東をみる



T4 SD-10 北から南をみる

⑬ 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野568-1

調査期間 1993年5月6日～6月16日

調査面積 330㎡



調査地位置図

高野遺跡は、縄文時代～近代にいたる複合遺跡であり、総体的に古墳時代と中世の遺構が多く認められている。中世では、平安～鎌倉時代を主体とし、掘立柱建物が随所に検出されている。本調査区の中ノ井川を隔てた東隣の調査においても、当該期の掘立柱建物が検出されている。

今回検出した遺構は、古墳時代と平安～鎌倉時代の二時期に大別できる。

古墳時代の遺構は、トレンチ西側に検出した周溝を伴う古墳で、西・南二辺を確認した。周溝は幅約1.2m、深さ約1mを測り、西辺からは、4世紀頃に比定される供献用と思われる近江型の甕が出土した。

中世の遺構は、トレンチ東側を中心に検出し、建て替えによる時期差を持つ掘立柱建物や、溝・土壇等を確認した。

掘立柱建物は4棟を確認した。柱穴からは、11～13世紀代の黒色土器があり、特に12世紀代を主体としている。建物は重複関係からSB-2、4が先行し、SB-1からSB-3へと変遷をたどっている。

溝には、区画溝と考えられるものを検出した。SD-1は幅約1m、深さ約0.2mを測る。SD-4と併せてSB-1に併行する区画溝と考えられるSD-8は幅約0.7m、深

さ約0.2mを測り、トレンチ内をコの字状に巡る。SB-3に併行する時期のものと考えられる。

掘立柱建物で、最も古い時期に属するSB-2・4は、北東側のピットが埋土により覆われており、SB-1・3は整地層(埋土)上に構築されていたことを確認した。

整地層を除去すると、南から北にかけて、約13～20cmの比高差を持つ地山面の傾斜が見られた。先述の東隣調査区では、中ノ井川に平行する形で、トレンチ西南側に流路があり、流路に対する地山面の傾斜も一部で認められた。このことから、当該調査区の傾斜地山面は、中ノ井川開削に関わる可能性がある。

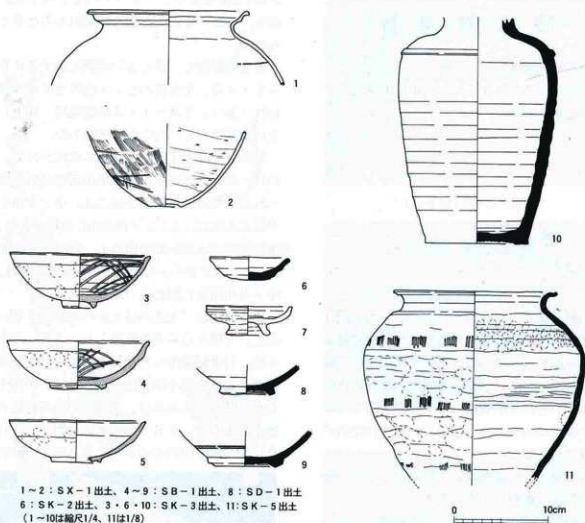
出土遺物は、先述の柱穴からの黒色土器の他に、土壇からも多数検出した。SK-3からは、11世紀後半～12世紀前半頃の黒色土器の他、台付きの土師質皿や東播系の壺が出土した。SK-5からは、常滑焼の淡茶褐色の甕が出土した。SK-5の共伴遺物から、12世紀中～後半頃のものと考えられる。(藤岡)



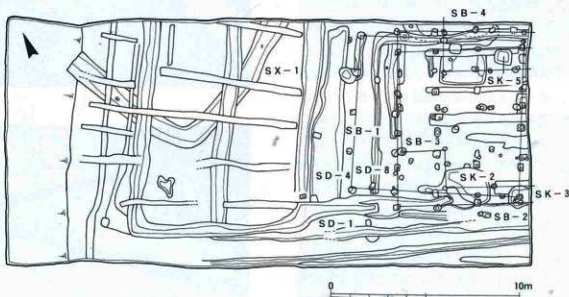
調査地全景



SX-1



出土遺物実測図



調査地遺構図

⑬ 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野568-1

調査期間 1993年7月14日～8月13日

調査面積 330㎡

調査地の現況は、西側の都市計画道路の高さに合わせ水田面より1m前後の盛土がなされていた。調査では、盛土と水田面以下の粘質土とを分けて掘り下げたが、水田耕作土の下層も盛土でありその下からもう一面の水田面が現われた。下層水田面は、道路面より1.5m低く、道路工事に伴い工事残土で地上げをしたようである。旧地形は、北側の中ノ井川に向かって低くなっており、もともと「込み田」と呼ばれる泥深い低湿田だったと聞く。地山は、TP106.10mのレベルで検出され、これは隣接する現中ノ井川の川底のレベルとほぼ同じである。地山土は、淡茶あるいは、濃黄色粗粒粘質土であるが下層は粒子が粗く砂質を呈する。

遺構は、土坑、溝、ピット等を検出した。

土坑1は、縦1.8m、横0.9mの長方形を呈する。深さ0.2mを測り、中世の瓦片が4点出土した。土坑2～土坑7は、平均して1.5



調査地位置図

m～2mの規模のものが多く、深さは1.5m前後である。出土遺物はない。辻・高野・岩畑遺跡で多く検出されている地山土採取のための土取り坑であろう。その他の溝、ピットも出土遺物はない。(平井)

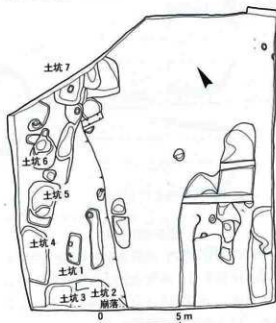


図2 遺構図



作業風景



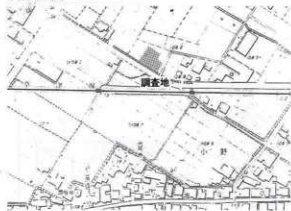
土坑2・土坑3

② 高野遺跡

調査地 栗東町大字六地藏字高木1147-1,3

調査期間 1993年8月5日～9月22日

調査面積 475m²



調査地位置図

今回の調査区は、高野遺跡の範囲の中でも南端に位置する。高野遺跡は古墳時代を中心とするが、当調査区は奈良時代を中心としている。以下時代毎に概述する。

I期 古墳時代前期

T-1のSD-2やT-2のSD-4・5の下層で検出された、SD-8が該当する。礫を混入する砂質土層の流路であり、庄内・布留併行期の土器を確認した。

II期 古墳時代後～白鳳時代

SD-2・4が該当する。SD-2は幅が1～2m、深さ0.7mを測る。7～8世紀初頭の時期に比定される須恵器等が出土した。SD-4は、幅4～5.5m、深さ0.8mを測る。6世紀後半～7世紀代を中心とする須恵器等が出土した。SD-2と4は層序において重複関係があり、SD-2が後出している。

III期 奈良時代

流路では、SD-1・5が該当する。SD-1は、幅1.7m、深さ0.3mを測る。8世紀後半頃の須恵器が出土した。SD-5は、幅3～4.5m、深さ0.8mを測る。重複関係から、SD-4に後出するものである。8～9世紀初頭の須恵器等が出土した。

検出した掘立柱建物では、SB-2～4が該当する。SB-2は、2×3間以上を検出した。柱穴からは、8世紀前半の須恵器が出土しており、奈良時代頃の所屬と考えられる。建物の方位軸は磁北により、約12度東に振れている。SB-3は2×3間以上、SB-4は2×4間以上を検出した。2棟は重複関係により、SB-4が後出するが、いずれもSD-4が廃絶した後に構築されたものである。建物の方位軸は磁北により約19度東に振れている。SD-6は、所屬時期を特定し得ないが、方位軸がSB-3・4に近い、区画溝の可能性がある。奈良時代に相当する建物は、必ずしも真北方向を指していないが、周囲に残る条里地割りとは異なる方位軸を呈している。

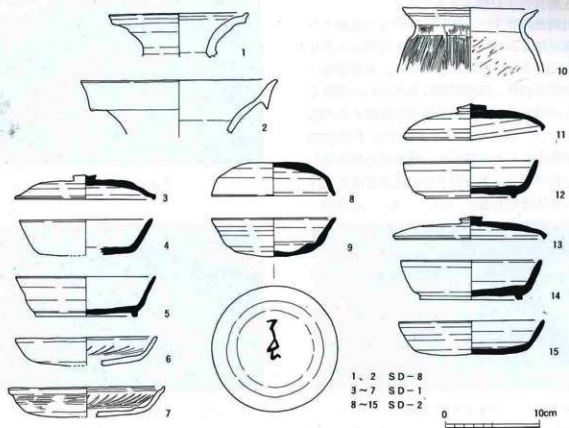
IV平安時代以降

平安時代から中世にかけての遺構には、ピット・溝・土壌がある。SK-2からは、黒色土器や羽釜が出土しており、11世紀頃の所産と考えられる。遺構に伴う遺物は、おおむねこの時期を下限とし、これ以降に建物跡等の遺構は見られない。

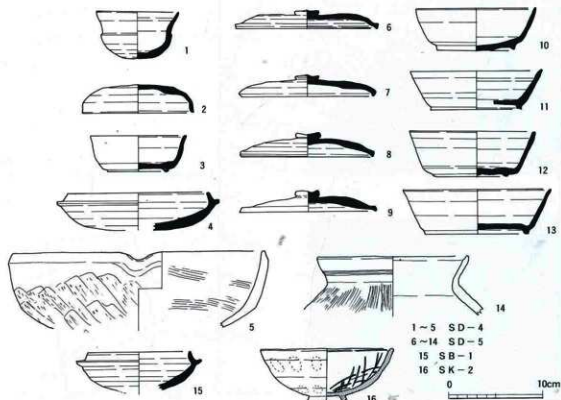
出土遺物について

遺物の詳細は、時期等を遺構と共に概述しており割愛する。ここでは特徴的な事を述べるに留める。遺物は庄内式から11世紀代の黒色土器まで、600年の時期差があるが、最も豊富に土器が見られたのは、7～8世紀代の律令制期にあたる。当該期の器種構成は、須恵器の杯蓋・杯身や土師皿である。土師皿には暗文を持つものも見られたが、日常雑器が主流である。

須恵器には墨書土器も見られた。すでに墨跡が薄くなり、判読しづらいが「了会」と記されていると思われる。「了会」は人名の可能性があり、須恵器の出土量の豊富さと併せて、調査区が他の一般集落と区別された格式の高い地点であったと考えられる。



トレンチ1 出土遺物実測図



トレンチ2 出土遺物実測図

まとめ

当調査区は7～8世紀に盛隆した遺跡である事が確認された。遺構も柱穴規模の大きな真北方向に近い建物が存在する。また遺物にも特徴があり、律令制期にふさわしい遺跡である。特に「了会」の墨書土器は館名の可能性もあり、西へ600mと近接する手原遺跡（手原庵寺）との関係や、南を走る東海道との位置づけ等、律令制下との関連で追求されべき地域である。（藤岡）



トレンチ2 北側

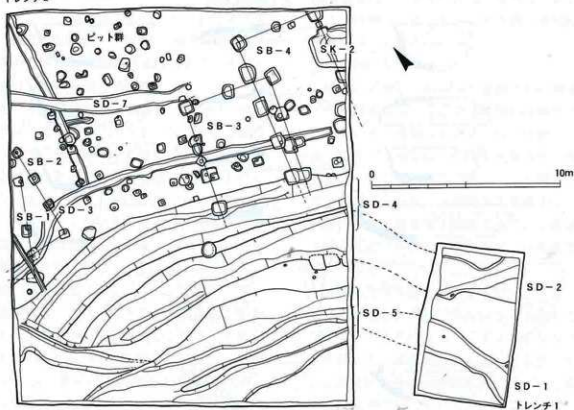


トレンチ1 全景



トレンチ2 南側

トレンチ2



調査地遺構図

② 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野335他

調査期間 1993年11月4日～12月13日

調査面積 450㎡

高野遺跡は、中ノ井川と旧葉山川に挟まれた扇状地上に形成された、古墳時代を中心とした複合遺跡であり、本調査地はその中央部に位置している。

今回の調査では、奈良時代や平安から鎌倉時代にかけての遺構・遺物を確認した。

遺構は掘立柱建物4棟とピット・土壇・溝等を検出した。SB-1は、2×2間の規模であり、柱穴は方形の掘り方を呈している。SB-2は1×1間以上を検出した。両建物の方位軸は、磁北によりN-3°-Eとなり、周辺に展開している条里地割りと方位を異にしている。建物は時期を特定する遺物に恵まれなかったが、隣接する岩畑遺跡で見られる真北方向の建物との関連を考えた場合、奈良時代の可能性が高い。

中世の遺構では、掘立柱建物や土壇を検出



調査地位置図

した。SB-3は、3×5間以上の規模であり、磁北によりN-46°-Eの方位軸をとる。SB-4は、3×4間以上を検出した。磁北によりN-45°-Eの方位軸をとる。SB-3・4からは、12～13世紀代の黒色土器等が見られた。両建物は、方位では周囲に残る条里地割りに等しい。

掘立柱建物付近には、土壇が4基検出されている。SK-1は4×2.2mの長方形を呈し、0.2mの深さである。底面は平坦で、茶褐色粘質土の地山が踏み固められて形成されている。SK-2は、規模2×4m、深さ0.2mで、重複関係からSK-1に後出する。SK-3は、規模1.5×2m、深さ0.1mで不定形な遺構である。13世紀代の瓦器碗等が出土している。各土壇はいずれもSB-3・4に先行して作られている。当調査区の中世遺構は、13世紀代に廃絶する。町内の中世遺跡の多くが当該期に廃絶しているが、その関連性も含めて追求されるべき課題は多い。(藤岡)



調査区北側全景



調査区南側全景

黑色土器



SB-3



SB-3

瓦器



SD-1

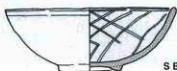
黑色土器



SD-1

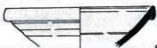


SK-1



SB-4

白磁



SB-4

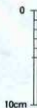
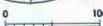
土師皿



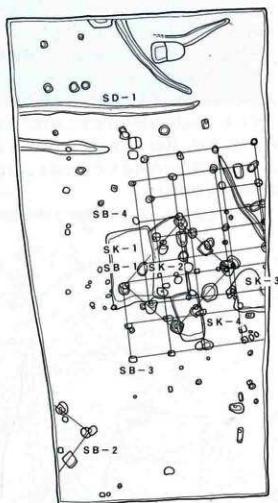
SB-4



SB-3



SK-3 出土遺物実測図



調査地遺構図

② 辻 遺 跡

調査地 栗東町高野616-1

調査期間 1993年8月20日～10月6日

調査面積 402m²



調査地位置図



掘削状況



SH-1

辻遺跡は、野洲川左岸自然堤防上に位置する、縄文時代から近代にいたる複合遺跡である。とくに古墳時代には、堅穴住居の密集する集落を形成している。

今回の調査地は、辻遺跡の南端、高野遺跡と接する地点にある。東南側の県道調査では縄文時代晩期の流路をはじめとして、4世紀および7世紀の堅穴住居、5～6世紀の古墳さらに平安時代の溝が出土している。本調査区においても、それらとほぼ連続する遺構や遺物がみつまっている。

縄文時代の遺物には土器片および石鏃があり、いずれも後世に掘られた遺構から出土している。

古墳時代前期のものに、堅穴住居（SH-1、2）がある。SH-1の規模は4.7×5mで中央に地床炉をもつ。土師器高杯・壺・甕、鉄製刀子が出土した。SH-2は、柱穴等は明らかにならなかった。出土遺物には、土師器壺・高杯がある。



SX-1 周濠土層



SX-1 全景

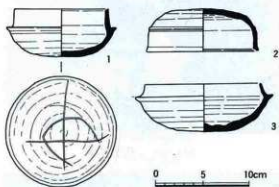
古墳は2基(SX-1・2)みつかっており、いずれも県道調査区と連続する方墳である。SX-1は、1辺約15mのもので、幅約2.5mの周溝からは、円筒埴輪(川西編年Ⅳ期)、須恵器杯、および古墳時代前期の土器が出土している。SX-2は、1辺10m、周溝幅約1.5mの方墳である。本調査区からは土師器片のみの出土であるが、県道調査で須

恵器が出土しており、5世紀後半から6世紀初頭のものと考えられている。

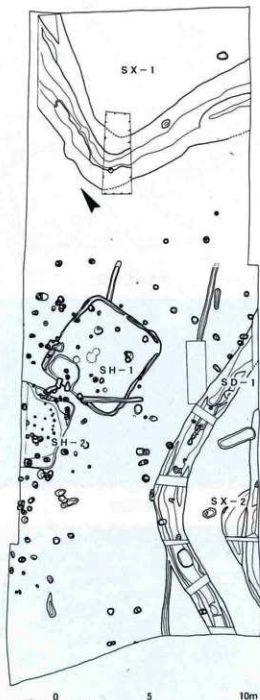
平安時代(11世紀)の遺構には、溝、ピットがある。溝は幅約1.5mで深さ約0.5m、須恵器甕・壺、土師皿などが出土している。ピットからは建物としてのまとまりをとらえることはできなかった。(雨森)



SX-1 土器出土状況



SX-1 出土遺物



調査地遺構図

② 辻 遺 跡

調査地 栗東町大字辻字小坂西419-1

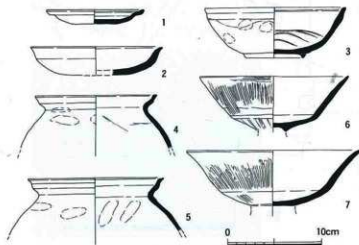
調査面積 約380㎡

調査期間 1993年11月8日～12月17日



調査地位置図

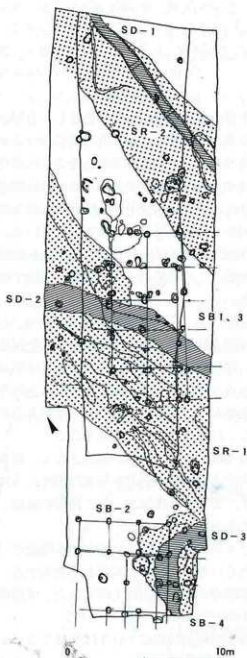
今回確認された遺構は、掘立柱建物、溝、旧河道、土坑、ピット等がある。時期は大きく古墳時代前期～後期と平安時代後期の2時期に分けることができる。I期の遺構としては、旧河道SR-1とSR-2が存在する。ともに南北方向にのびるもので、深さは約0.7～1.0mである。また、これらの河道がほとんど埋まってから、最後に細い溝となって存在していた部分がSD-1、2、3にあたる。II期の遺構としては、掘立柱建物SB-1、2、3がある。建物の主軸は、SB-1と3がN-27°-Eにとり、SB-2がN-30°-Eにとる。SB-2は、ほぼ条里方向を意識した建物である。(近藤)



I期(SR-1, 2)の遺物(4～7)・II期(SB)の遺物(1～3)



南からSB-1、3をみる



② 中村遺跡

調査地 栗東町御園1829

調査期間 1993年10月18日・19日

調査面積 58㎡



調査位置図

中村遺跡は金勝川右岸に位置し、金勝山地から連なる丘陵地と狭小な平野に成り立つ集落跡である。この遺跡では、過去に区画整理事業や土地区画整理事業に先立ち発掘調査がなされ、奈良時代後半から鎌倉時代前半期の住居跡や鈔造施設などが報告されている。

今回の調査地は中村遺跡の東端、丘陵裾にあたる。この結果、下記の遺構、遺物を確認した。

遺構では、ピット13箇所と暗渠があり、ピットは掘立柱建物1棟、柱列1として把握される。建物ではその規模が1間以上×2間以上になる。およそ10度、磁北から東に振れた軸方位をもつ。柱を立てたピットは隅丸方形を呈し、柱穴径は18cm程度を計る。

柱列は、2間の規模が確認される。建物の軸方位よりさらに磁北から東に振れた方位を示す。ピットは建物ピットと同様の規模、形状である。

ピットを壊して後世の暗渠排水施設がつくられている。人の拳大の礫石を使用する。

本調査の出土遺物は土師器数点、灰釉陶器片1点がある。

建物遺構の時期については明確でない。

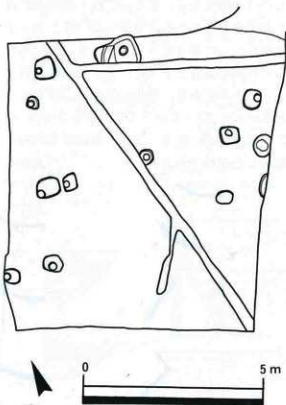
(清水)



作業風景



調査地全景



調査地遺構図

② 小野遺跡

調査地 栗東町大字小野字中菅井656他

調査期間 1994年1月10日～2月13日

調査面積 400㎡



調査地位置図

小野遺跡は、野洲川が主として形成する扇状地の丘陵寄りの地点に所在し、旧葉山川の左岸に位置する。古墳時代から中世にかけての集落跡として知られている本遺跡であるが、調査件数も少なく、遺跡の詳細は明らかになっていない。西側に近接して、古代寺院や官衙跡が想定される手原遺跡があり、その周辺には条里と異なる正南北方向の地割がのこされている。また、手原遺跡から、小野遺跡の北側にかけて、近世東海道が通過している。

今回の調査地は、小野遺跡の北西隅にあた

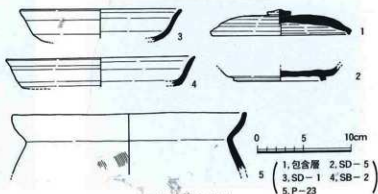
る。検出された遺構には、掘立柱建物4棟・溝列・溝がある。これらのうち、磁北にちかい方位をとるものは、奈良時代後半から平安時代前期の遺構である。SB-1、2は総柱建物で、2間×3間の規模である。柱掘り方は1辺約50～80cmの隅丸方形で、柱穴の直径は15～20cmである。SB-3は2間以上×3間以上、SB-4は2間×2間以上である。SB-1～3に伴って、溝列(SA-1)が存在する。SB-1の西側に添っている溝(SD-1)は、幅約20cm、深さ10cmで、SB-2の柱穴より新しい。ほかに、トレンチ北隅に、東西方向の溝があり、建物群に伴う時期のものである可能性がある。

このほかの遺構は、おおむね条里方向をとるものである。SD-5は、幅約60cm、深さ約20cmの、断面逆台形の溝で、明褐色粘質土で埋まっている。遺物には、奈良時代～平安時代前期のものがあるが、隣接する建物群等からの流入も考えられ、その形成された年代は明らかではない。

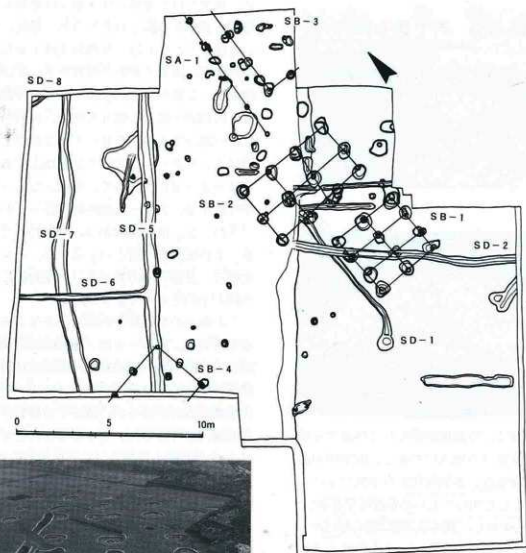
今回の調査によって、奈良時代後半から平安時代前期にかけての小野遺跡では、隣接する手原遺跡周辺の地割に類似する方位の建物群が存在することが明らかになった。部分的な調査であり、建物群がどのように構成されたものかは判断できないが、手原遺跡やその付近を通っていた可能性のある古代官道に関連するものとして、注目される。(雨森)



SB-1 柱穴(P-8)



小野遺跡出土土器



SB-1、2 (南からみる)



SD-5



建物群全景 (北からみる)

国庫補助事業 埋蔵文化財調査

国庫補助事業一覧表

26	綾 遺 跡	北中小路27-1	個人住宅建設	流路、ピット		56	清水
27	蜂 屋 遺 跡	蜂屋字ニナアセ604-1	個人住宅建設	溝・土壇 (中)	須恵器、土師器、黒色土器、信楽焼	57	雨森
28	高 野 遺 跡	大橋4丁目288-4	個人住宅建設	土壇・ピット (古)	須恵器、古式土師器	58	雨森
29	高 野 遺 跡	大橋4丁目288-5	個人住宅建設	ピット・土壇 (古)	古式土師器	58	雨森
30	高 野 遺 跡	大橋4丁目288-1	個人住宅建設	溝	土師器	59	雨森
31	高 野 遺 跡	六地藏1051-3	個人住宅建設	溝		59	平井
32	下戸山古墳	下戸山字野海道	測量調査	古墳1基	古式土師器、埴輪	60-61	佐伯

②6 縄 遺 跡

調査地 栗東町北中小路27-1

調査期間 1993年10月6日・7日

調査面積 25m²



調査位置図

縄遺跡は中山道沿いに鎮座する大宝神社周辺に広がる集落跡である。これまでの調査では弥生から室町時代の遺構・遺物が数多く発掘されている。とりわけて平安時代末葉から鎌倉時代の時期に属するものが顕著である。

本調査ではその対象面積は大きくないが、溝状遺構、土壌、ピットの遺構を確認した。

遺構面は造成盛土面から約90cm下で、標高

94.1mを計る高さにある。遺構面となる土層は、砂分を含む黄褐色系の堆積土である。遺構はこの堆積層から切り込まれる。

ピットは10箇所ある。隅丸方形、円形、不整形を呈する。並びを想定されるものもあるが、不明確である。

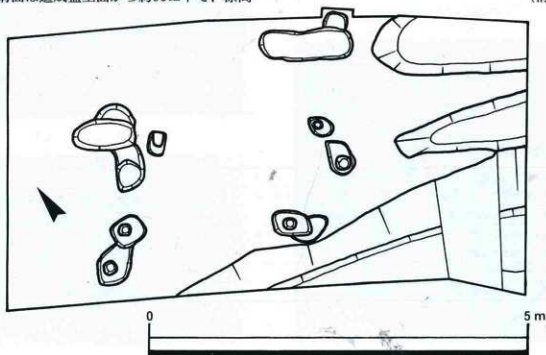
調査区の南側では幅2m以上を計る溝を確認した。遺構面から溝底までは約50cmを計る。溝底には灰褐色砂、中間層に灰褐色土、最上層に黄灰色土が堆積する。

本調査の出土遺物には土師器、須恵器、陶器および黒色土器がある。いずれも細片である。溝内から10世紀代と12～13世紀代の時期に属するとみられる土器が出土する。ピット内からは時期を特定するに足る遺物出土をみない。

本調査地の周辺調査では12～13世紀代の溝に画された屋敷地が複数確認されているが、本調査地の性格については、現下には判断しえない。

なお、本調査地の北側でも調査が実施されている。調査概要が本書に記載される予定である。本調査の不明を補うものと思われる。

(清水)



② 蜂 屋 遺 跡

調 査 地 栗東町大字蜂屋字ニナアセ604-6

調査期間 1993年7月20日～7月23日

調査面積 196㎡



調査地位置図



検出状況



調査風景

蜂屋遺跡は、古墳時代～中世にいたる複合遺跡である。遺跡地内には宇和宮神社があり、三間社流造りの本殿は室町時代のもので、国の重要文化財に指定されている。また、神社付近には古墳群が存在し、さらに古代寺院の存在も考えられている。また、本遺跡の西隣の野尻遺跡では、豪族居館と想定される遺構がみつまっている。

今回の調査では土壌2基、小溝群がみつかった。土壌からは12～13世紀の黒色土器が出土しており、調査区西側に散在中世の掘立柱建物と一連のものであろう。

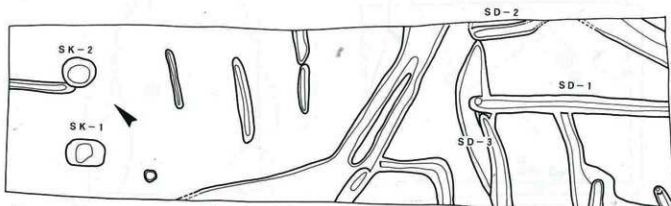
小溝群は北西隣における1992年の調査でみついているものと連続するものである。その方位は条理に規制されたもので、中世もしくはそれ以降のものと考えられる。

今回の調査では、建物等は明確にすることはできなかったが、中世前期の蜂屋遺跡における集落の状況の一端を知る資料が得られた。

(雨森)



調査地全景



調査地遺構図

⑳ 高野遺跡

調査地 栗東町大橋4丁目288-4

調査期間 1993年6月10日～11日

調査面積 37㎡

野洲川左岸に立地する高野遺跡のうち、西寄りの大橋地区においては、これまでの調査で、古墳時代の堅穴住居が散見されるほか、平安時代から中世にいたるまでの掘立柱建物が発見されている。

今回の調査では、建物としてのまとまりをとられなかったが、古墳時代初頭の遺物を含むピットがみつき、集落のひろがりをおえ得る資料となった。

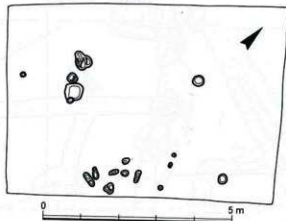
(雨森)



調査位置図



掘削状況



調査地遺構図

㉑ 高野遺跡

調査地 栗東町大橋4丁目288-5

調査期間 1993年6月25日

調査面積 37㎡

今回の調査区の主な遺構は、ピットである。遺物が出土していなかったが、③調査区で出土している古墳時代初頭のピットと、一連のものであろう。

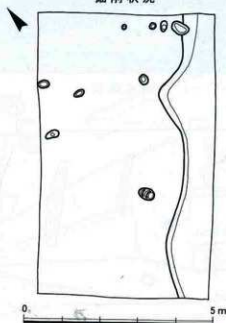
(雨森)



調査位置図



掘削状況



調査地遺構図

③① 高野遺跡

調査地 栗東町大橋4丁目288-1
調査期間 1993年6月10日～6月11日
調査面積 40㎡

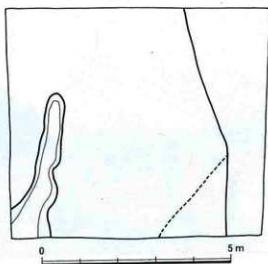
本調査区では、時期不明の溝1条の検出にとどまった。調査地は北東側に緩やかに落ちこんでおり、遺構の集中する地区は南西側に存在することがわかった。(雨森)



調査地位置図



調査地全景



調査地遺構図

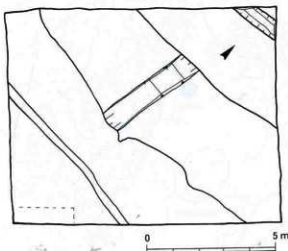
③① 高野遺跡

調査地 栗東町大字六地藏字目取1051-3
調査期間 1993年11月10日～11月15日
調査面積 85㎡

当調査地は高野遺跡の南端に位置し、古墳時代の集落跡が発見された葉山中学校用地に近接する。そのため調査前から同様の遺構の検出が予想されていた。しかし、今回の調査では、3条の溝が検出されるにとどまった。これらの溝の時期等は、出土遺物に恵まれず不詳であるが、流れの方向が現在の付近の地割りとは異なり、ほぼ東西方向に流れていることにより、栗太条里施行以前のものと考えられる。(平井)



調査地位置図



調査地遺構図

③ 下戸山古墳

調査地 下戸山字野海道

調査期間 1992年3月12日～3月31日

調査面積 6,400㎡

下戸山古墳は野洲川左岸の沖積地を一望に見渡す丘陵上に位置する古墳で、周辺には比較的古墳が多く分布しており、南方約200mには草津市の北谷古墳群が所在する。古墳群の最高所に築かれた11号墳の主体部である粘土槨からは、仿製方格矩鏡1面や鉄形石5個などが出土しており4世紀後半のこの地域の首長墓として位置付けられている。また北西600mには墳長90mの帆立貝形古墳の地山古墳が所在し、1991年度の墳丘裾及び周濠の調査により出土した埴輪からその築造時期は5世紀前半に求められている。そして6世紀代の後期群集墳は、前記の北谷古墳群、南東300mに小槻大社古墳群、北東600mには和田古墳群が分布する。

下戸山古墳は、直径30m程の円墳状の高まりが認められるが、現在は周辺地域の共同墓地として利用されており、墓地の作り替えな

どにより破壊が徐々に進んでいる。また、現在は確認されないが、数年前までは墳頂部に大きな落ち込みが見られたということと、地元には、金の鶏が出たという伝承があり、過去に盗掘を受けた可能性が大きい。

調査は、墳丘規模等の確認調査で、墳丘測量は平板（S=1:50）により実施した。

その結果、古墳は南東側から延びてくる尾根をカットして作られており。墳丘の規模は、直径50m、墳頂の平坦部16m、高さ7.5mであった。墳形は、墓地となっているため断定はできないが、地形からみて北西側に前方部が付くと思われる。よって、前方後円墳となるならば墳長は80～90mの規模となる。

墳丘はトレンチなどによる掘り込みは行っていないが、墳丘表面や削られた崖面の観察により、20～30cm程の割石の葺石で葺かれていることが解る。採集された遺物は少ないが、土師質の埴輪片や、布留式土器の小破片がある。以上の所見から、下戸山古墳は、4世紀後半代の古墳と考えられ、同一丘陵上の高所から、北谷11号墳→下戸山古墳→地山古墳と首長墓が連続して築かれたと考えて大過ないであろう。（佐伯）



調査位置図



西側から墳丘を見る



町事業 埋蔵文化財調査

町事業一覧表

33	和田古墳群 下戸山字和田	公園整備	古墳9基	須恵器、土師器、鉄器、玉類、人骨	64-69 大崎 佐伯
----	--------------	------	------	------------------	----------------

③ 和田古墳群

所在地 下戸山字和田

調査期間 1992年8月18日～1993年12月28日

調査面積 2,800㎡

湖南地域の沖積平野を一望する独立丘陵安養寺山西麓の尾根上標高117m～127mに分布する後群集墳で、古墳群からは、草津市から大津市域を広く見渡すことができる。そして金勝川を挟んで眼前の丘陵には、前期末から中期後半に連続して築かれた首長墓である北谷11号墳、下戸山古墳、地山古墳が所在する。また、その丘陵には律令期に栗太郡衙（岡遺跡）が置かれるなど、古代においてこの地が重要な地域であったことが窺える。発掘調査は古墳群整備保存を目的とし、安養寺山古墳群調査整備委員会により実施された。調査された古墳は9基で、すべて円墳である。古墳は6世紀中頃から築造が始まり、7世紀前半まで追葬が行われている。墳丘規模は、最高所に築かれた1号墳が最大で、直径16～17m、残存高3.3mを測る。一方最小規模の4号墳は、直径8mである。主体部は、堅穴系横口式石室8基と横穴式石室1基で、横穴

式石室を主体部とした8号墳は、古墳群中最も新しい時期の築造である（7世紀初頭）。堅穴系の石室は、玄室に対して羨道が短く、しきり石や傾斜により羨道部を高く作っている。また墓道が付くのも特徴である。石室は最大規模の1号墳で、玄室長3.6m、幅2.1m。羨道長1.2m、幅0.8mで、長さ3.2mの墓道が付く。横穴式石室の8号墳は、玄室長2.85m、幅は奥壁で1.4m、袖石付近で1.8m、羨道長2.85m、幅1.2mである。玄室床面は、礫床の有るもの（1・2・9・10・11・12）と無いもの（4・5・8号墳）に別れ、後者が時期的には新しく位置づけられる。

各古墳の石室遺存状況は、石取りのため劣悪であったが、比較的豊富な遺物の出土をみた。主な古墳の出土遺物は以下のとおりである。

1号墳

〈装身具〉耳環（金製）2、ガラス製管玉14、碧玉製管玉5、ガラス製小玉8、滑石製白玉2、水晶製切子玉6、水晶製算盤玉3、水晶製丸玉4、埋木製甕玉8、土玉20、〈武具〉鉄鎌85以上、鉄地銀張環頭大刀柄頭片1、〈工具〉鹿角装刀子1、刀子1、〈馬具〉鍔組2、鉸具1、辻金具（鉄地金張り無脚）1、



調査地位置図

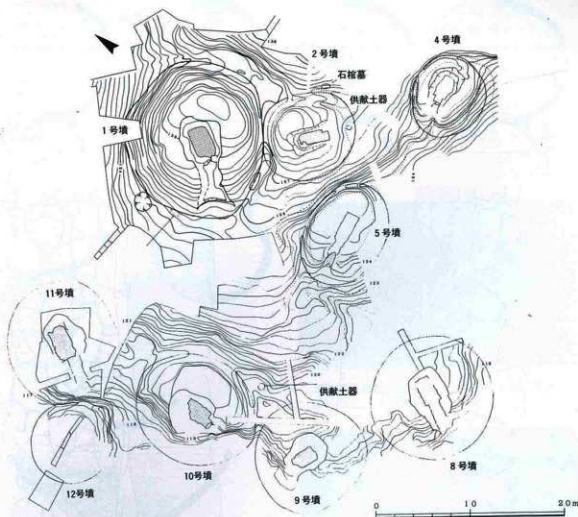


図2 古墳群地形図

雲珠（鉄製、中央部イモ貝）3、〈土器〉各種須恵器、土師器高杯。

2号墳

〈装身具〉土玉6点、〈武具〉鉄鎌1、
〈工具〉刀子1、〈土器〉各種須恵器。

箱式石棺（2号墳周溝内）

〈装身具〉土玉（丸玉4、甕玉4）、〈土器〉土師器長胴甕2

5号墳

〈装身具〉金環3、〈武器〉鉄鎌7、〈工具〉釘17、鋸4、〈馬具〉鞍2、鉸具2、〈土器〉須恵器各種、土師器壺1。

8号墳

〈装身具〉金環7、粟玉、琥珀製甕6、碧玉製管玉1、ガラス玉2、滑石製白玉2、土製

白玉1、金銅製空玉6、〈武具〉銀装大刀2、鉄鎌2、〈工具〉釘15、鋸8、〈馬具〉馬鈴1、轡（素環）1。

10号墳

〈装身具〉金環1、銀環2、ガラス玉13、
〈武具〉鉄鎌15、〈工具〉鹿角装刀子3、刀子1、鎌1、〈馬具〉辻金具（鉄地金銅張・組合式）4、鉸具4、〈土器〉須恵器各種

11号墳

〈装身具〉金環1、銀環4、水晶製切子玉5、琥珀製甕玉2、ガラス玉1、土玉79、土玉（黒漆塗り）122、土製管玉（黒漆塗り）10、碧玉製平玉7、碧玉製丸玉1、瑪瑙製勾玉1、
〈武具〉鉄鎌、矛1、石突1、〈工具〉鹿角柄鋸1、鹿角装刀子3、〈馬具〉轡（十字文

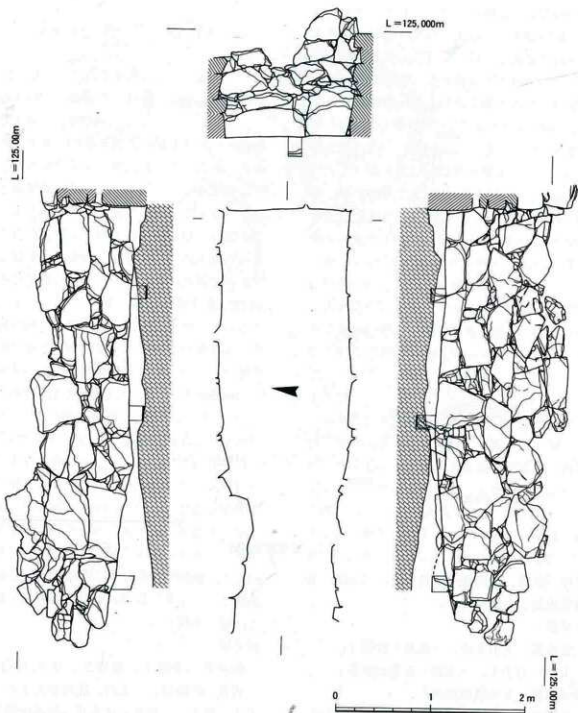


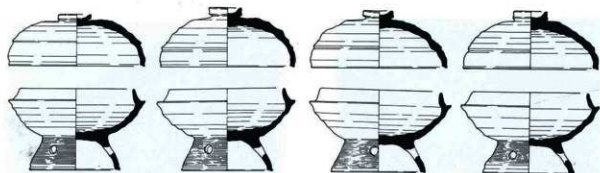
図3 5号墳石室実測図 (S=1:40)

楕円形鏡板付) 1、杏葉 (三葉文楕円形) 3、雲珠1、辻金具7、(以上全て鉄地金銅張)、鞍4、鉸具3、鎧組2、飾り金具 (鉄地金銅張) 14、〈土器〉須恵器各種

出土した須恵器の時期は、6世紀中頃から7世紀前半である。その他、1・2・5・10号墳では前庭部や古墳の周囲から供献品が出土

しており、墓前祭祀の好例といえる。また、金製耳環や、朝鮮半島と九州に分布の中心があるイモ貝製雲珠の出土、1・11号墳の礫床にみられる雲母片、堅穴系の石室など、渡来系氏族との関わりを示す内容は興味深い。

(佐伯)



▲前底部供献土器

▼玄室石室床出土土器

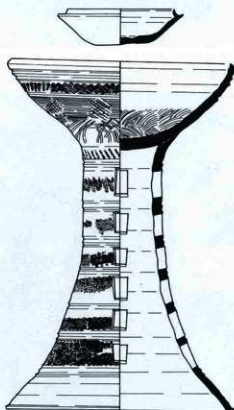


図4 2号墳出土遺物 (S=1:4)



2号墳前底部供献土器 有蓋高杯5点と壺1点が出土。(6世紀中葉)



2号墳石室 礫床が2面ある第4図の杯身・器台は上面の出土。手前が奥壁。



2号墳東側周溝内の石棺 蓋石を除去した状態。内法長約60cm、幅20cm真上から見る。



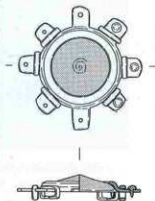
1号墳石室 奥壁側から見る。袖石のみが残る。



1号墳雲珠出土状況 袖石付近から3点出土。



1号墳雲珠 中央部にイモ貝と思われる巻貝をはめ込んだ鉄製のもの。



1号墳墳丘西側裾部供献品 有蓋高杯5、無蓋高杯1、壺(埴)2、甌1、土師器高杯4、土玉34が出土。



5号墳前底部供献土器 破碎された甕と土師器の壺が出土。



5号墳石室 奥壁側から見る。写真上方の前底部に供献土器がある。



8号墳石室内遺物出土状況 右が玄門。



8号墳 馬鈴出土状況。



10号墳石室 写真右上方が羨道。



9号墳石室 礎床のみ残る。奥壁から。



10号墳石室 袖部分須恵器。



11号墳石室 奥壁から。



10号墳東側周溝内 供献土器。



11号墳馬具出土状況 右の須恵器はミニチュアの甕

発 行 日 1994年9月1日

編集・発行 (財)栗東町文化体育振興事業団
滋賀県栗太郡栗東町川辺390-1 〒520-30
栗東町民体育館内 TEL 0775-53-4321

印刷・製本 マルキ印刷株式会社草津営業所
滋賀県草津市上笠4丁目3-17 〒525
TEL 0775-64-4475